

Title	南朝鮮解放の政治力学：米軍進駐と左右対立の構図
Sub Title	The political dynamics of South Korean liberation : the U.S. occupation and the right - left confrontation
Author	小此木, 政夫(Okonogi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2015
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.88, No.4 (2015. 4) ,p.1- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20150428-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20150428-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 南朝鮮解放の政治力学

——米軍進駐と左右対立の構図——

小 此 木 政 夫

はじめに

一 左派勢力の建国準備運動と右派勢力の反発

- 1 遠藤柳作と呂運亨の会談——誤れる情勢判断
  - 2 建国準備委員会の結成——建国運動の出発点
  - 3 呂運亨と宋鎮禹——左右対立の原型
  - 4 建国準備委員会の左傾化——左派政権樹立への道
  - 5 右派勢力の結集——韓国民民主党の行動方針
- 二 朝鮮人民共和国の樹立と米軍政府の対応
- 1 朴憲永と朝鮮共産党の再建
  - 2 朝鮮人民共和国の樹立——機会主義
  - 3 米軍当局の初期情勢評価——誤解、誇張そして独断
  - 4 米軍政府 vs. 朝鮮人民共和国——主権論争

三 米軍政府と韓国民民主党の急接近

- 1 軍政長官顧問会議——保守派人材の登用
  - 2 米軍部隊による秩序回復——緊密な提携
- おわりに

## はじめに

一九四五年八月一〇日に、条件付きながら、日本政府が降服意思を表明したとき、朝鮮半島には連合国のいかなる軍隊も存在しなかった。八月九日に、広島への原爆投下に促されて参戦したソ連軍は、一三日にはソ連に隣接する北東部の要港である清津に上陸したが、それもウラジオストックに対する反撃を防止し、日本本土と関東軍の連絡を遮断するための満洲侵攻作戦の一部にほかならなかった。また、戦争終結後も、日本軍の武装解除が遅れたためか、敗戦の報せに茫然自失する日本人に同情したためか、あるいは朝鮮人自身が突然の事態を理解するのに手間取ったためか、日本人を対象にする暴動や殺戮など、不穏な事態が発生することはなかった。ある著名な宗教学者が指摘したように、大多数の朝鮮人にとって、解放は「盗賊のように思いがけずやってきた」のである。しかし、その到来を予想していた少数の朝鮮人にとっても、朝鮮解放が意味するものは難解であった。北緯三八度線を境界線として朝鮮半島が分割され、米ソの軍隊がそれぞれ南部および北部朝鮮に進駐したからである。カイロ宣言や戦時首脳会談の軌跡を振り返るまでもなく、そこには、「解放＝独立」の等式が成立しなかった。李昊宰が指摘するように、「解放が朝鮮民族に何をもちたらずかは、国際的には米ソが何に合意するか、国内的には朝鮮の諸勢力がそれに対応するかに全面的に左右される」という未確定かつ不安定な政治状況が出現したのである。事実、米第二四軍団の最初の部隊が仁川に上陸したとき、京城（ソウル）では、すでに左派勢力が「朝鮮人民共和国」の樹立を宣言して、新政府の組織に着手していた。ソ連との共同行動が破綻する可能性に目をつぶったまま、また英国や中国の参加が不確実なまま、米軍当局は米ソ両軍による三ヶ月間の初期占領が、米ソ英中の四カ国軍による共同占領と統一管理に移行し、やがて朝鮮全土に信託統治が実施されることを期待し続けたのである。朝鮮の「自由・独立」はその後に想定されていた。<sup>1)</sup>

占領初期の権力関係については、さまざまな角度からの分析が可能になる。第一に、勝者と敗者の間の関係は、いかなるものだったのだろうか。たとえば、三五年間にわたって朝鮮全土を統治した朝鮮総督府や戦争に備えて南朝鮮に配置された日本軍は、米軍進駐にいかに対応したのだろうか。当初は第七師団だけが、続いて二個師団が逐次的に投入されるという状況の下で、ホッジ (Hodge, John R.) 司令官は何を必要としたのだろうか。さらに、ともにソ連軍の南朝鮮侵入を恐れて、勝者と敗者はいかに協力したのだろうか。第二に、植民地統治の終焉によって、支配者と被支配者の間の権力関係はどのように変化したのだろうか。敗戦直後の総督府が何よりも憂慮したのは、戦後の混乱によって日本人の安全や財産が脅かされることであった。米軍が到着するまでの約三週間、総督府はいかにして朝鮮人指導者の協力を獲得して、南朝鮮の治安を維持しようとしたのだろうか。三八度線の設定はいつ、どのように朝鮮人指導者に伝えられたのだろうか。第三に、解放と同時に南朝鮮で開始された政治活動は、被解放者、すなわち現地政治勢力間の関係をいかに形成したのだろうか。左派勢力が着手した建国準備運動はどのように開始され、どのように建国運動に発展したのだろうか。そのなかで、呂運亨、安在鴻、朴憲永らの政治指導者は、どのような役割を演じたのだろうか。そもそも朝鮮建国準備委員会や朝鮮人民共和国とは何だったのだろうか。また、宋鎮禹、金性洙、金俊淵、趙炳玉など、韓国民主党に結集した右派勢力は、それどのように対抗したのだろうか。さらに、左右対立が激化するなかで、大韓民国臨時政府（重慶政府）や海外の独立運動指導者たちの存在は、どのように評価され、それはどのように南朝鮮情勢に影響を及ぼしたのだろうか。そして最後に、米軍政府は南朝鮮の政治勢力にどのように対応し、どのような権力関係を形成したのだろうか。とりわけ、政府を自称する朝鮮人民共和国にどのように対応したのだろうか。また、韓国民主党との緊密な提携はいかにして形成されたのだろうか。

\*この点について、本稿の読者にはぜひ拙稿「米軍の南朝鮮進駐―間接統治から直接統治へ―」（赤木完爾・今野茂 充編著『戦略史としてのアジア冷戦』慶應義塾大学出版会、二〇一三年、八三―一〇五頁）を併読いただきたい。

## 一 左派勢力の建国準備運動と右派勢力の反発

### 1 遠藤柳作と呂運亨の会談――誤れる情勢判断

第二次世界大戦の最終段階で、朝鮮軍（在朝鮮日本軍）は対米および対ソ、すなわち二正面の防衛作戦を準備していた。対米作戦については、六月二五日に沖縄本島での激戦が日本軍の玉砕によって終結したので、次に本土決戦、すなわち米軍の九州上陸を想定せざるをえなかった。さらに、もし米軍が上陸目標として北九州を選定すれば、それ以前に済州島攻略作戦が実施される可能性が大きいと判断して、済州島防衛のために第五八軍（三個師団と一個混成独立旅団）を編成し、縦深性のある陣地構築を急いだのである。また、米軍が朝鮮本土を目標にする場合には、群山方面に上陸するものと予想して、二月に従来の朝鮮軍を解体して、済州島を含む南部・中部朝鮮の防衛を任務にする第一七方面軍（野戦部隊）を編成した。ただし、米軍の作戦準備の間隔から判断して、それらの攻撃は一〇月以降になるものと予想した。他方、対ソ作戦に関しては、五月二八日の大本営の命令によって、関東軍総司令官が北部朝鮮の防衛を担当することになり、七月に中国の漢口にあった第三四軍司令部を咸興に移設した。それによって、ソ連軍による咸興および元山侵攻を撃退し、そこからの平壤および京城への侵出を阻止しようとしたのである。そのような状況を背景に、八月六日に広島に原子爆弾が投下され、それに促されて、ソ連は九日午前零時（ザバイカル時間）に対日戦争に突入した。八月一二日に国境に近い雄基と羅津を占領したソ連軍は、一三日には戦略的に重要な清津への陸海共同作戦を開始したのである。沖縄にある米軍よりも、

ソ連軍のソウルへの進撃が懸念される展開になった。<sup>(2)</sup>

しかし、日本政府からの連絡は必ずしも十分でなかった。朝鮮総督府警務局は、八月一〇日に短波放送を通じて、日本政府が「天皇の国家統治の大権」が犯されないことを条件にポツダム宣言受諾の意思を表明したことを知ったのである。いうまでもなく、ポツダム宣言は「朝鮮人民の奴隷状態に留意し、朝鮮をやがて自由かつ独立のものとする」との条項を含むカイロ宣言の履行を約束し、日本の主権を本州、北海道、九州、四国ならびに諸小島に局限していた。言い換えれば、総督府はそのような事態に独自に対応せざるをえなかったのである。治安維持の責任者であった西広忠雄警務局長にとって、最大の懸念材料はソ連軍のソウル進駐に伴って発生する略奪、暴行、付和雷同などであった。三八度線による分割占領を予想できないまま、西広は「清津に上陸しているソ連軍が汽車で南下すれば、京城までは二〇時間で達し得る」「ソ連軍がただちに刑務所の朝鮮人政治犯を釈放し、赤色政権を樹立するであろう」と考え、「第一に政治犯を釈放すること、第二は朝鮮人の手によって、治安維持をなさしめる」「それとともに経済犯も釈放する」ことが重要であるとの結論に到達したのである。協力を得るべき朝鮮人指導者として、西広は呂運亨、安在鴻、宋鎮禹の三人を思い浮かべた。この三人はそれぞれ有力新聞社代表を経験した朝鮮言論界の重鎮であり、日本の最後の戦争努力に協力しない者たちであった。「大物でありながら協力しない人物、そして有終の美を飾ろうとする総督府の善意を理解して、励ましてくれるだけの識見と度量を持つ人物」こそ、この時点で総督府が前面に押し立てたい朝鮮人指導者であった。そのなかで、解放直後の南朝鮮政治で最も重要な役割を演じたことになったのは呂運亨であった。呂運亨は青年や学生に人気のある左派民族主義者であり、社会主義者であった。また、安在鴻は学識豊かで、『朝鮮日報』で健筆を振るった中道右派民族主義者であった。宋鎮禹は湖南財閥と密接な関係にあり、資産階級や保守的知識人を代表する右派民族主義者であった。<sup>(3)</sup>

八月一四日午後二一時頃、同盟通信京城支局を通じて、西広警務局長は日本政府がポツダム宣言を無条件で受諾したことを知り、深夜に遠藤柳作政務総監を訪問した。西広と協議した後、遠藤はただちに高等法院検事長、憲兵隊司令官などの治安関係責任者を呼び出して、政治犯と経済犯の即時釈放についての了解を取り付けた。それは八月一五日午前三時のことであった。韓国併合から三・一独立運動までの時期に朝鮮総督府に秘書官、参事官などとして勤務した経験から、遠藤は西広と情勢認識を共有していたのである。また、西広と最初に協議した後、遠藤は長崎祐三・京城保護観察所長に電話で連絡して、翌日六時に呂運亨を政務総監官邸に連れてくるように命じた。そのときの模様について、一二年後に、遠藤は「大正八年三月一日の独立万才運動の情況と、朝鮮民衆の心の底にひそんでいる独立の熱望を知っておるから……解放される喜びに伴う激情にとりつかれて、無秩序的な暴動でも起こり得る憂いが多分にある」と考えて、「警務局長を中心……治安関係者の会議を招集した」と回想した。呂運亨を選んだ理由として、朝鮮民衆の間に高い名望を得ていたこと、過去に独立運動の経歴があったことに加えて、遠藤は平素から呂運亨の民族運動に対して「理解と尊敬の念」を抱いており、自分と「深い友情のつながり」があつたことを挙げた。遠藤はまた、自分自身がこの時期に宋鎮禹、安在鴻そして張徳秀と会談したとの説について、それを明確に否定し、「終戦前に総力聯盟への協力を要請したことがあるが、氏等はあつさり拒否して来たので、私も氏等の信念を理解して二度と勧めなかった」と証言した<sup>(4)</sup>。

一五日早朝、思想犯前歴者として長崎所長に付き添われて、さらに白允和・京城地方法院検事を通訳として、呂運亨は遠藤政務総監官邸を訪れた。支配者と被支配者が初めて対等に向かい合う歴史的な会談で、遠藤総監は率直に「今日十二時、ポツダム宣言受諾の詔勅が下る。すくなくとも十七日の午後二時ごろまでにソ連軍が京城に入るであろう。ソ連軍はまず日本軍の武装解除をする。そして刑務所にいる政治犯を釈放するであろう。そのときに、朝鮮民衆は付和雷同して暴動を起し、両民族が衝突するおそれがある。このような不祥事を防止する

ために、あらかじめ刑務所の思想犯や政治犯を釈放したい。連合国軍が入るまで、治安の維持は総督府があたるが、側面から協力をお願いしたい」と述べた。それに対して、呂運亨は「御期待にそうように努力する」と応じたとされる。また、遠藤は呂運亨に依頼して、安在鴻に「ともに治安維持に協力するよう」に伝言した。途中から会談に加わった西広は、呂に釈放前の思想犯・政治犯に軽率妄動しないように訴え、青年と学生にも冷静に行動するように説得するように要請した。さらに、「治安維持協力に必要ななら、朝鮮人警察官をあなたの下に移してもよい」と述べた。また、呂運亨からの要求に応じて、警察署や憲兵隊に留置されている未決政治犯を釈放し、集会の禁止を解除することを約束した。食糧問題については、「十月までは大丈夫である」と答えた。西広の回想によれば、二人の会話は「和氣に満ちた」ものであり、呂運亨は別れに際して西広に「健康を祈る」と述べて、手を差し伸べたとされる<sup>(5)</sup>。

このような日本側の記録は、呂運亨の弟である呂運弘の証言とほぼ一致する。一五日午前零時を回った頃、呂運弘は雲泥洞の宋圭桓宅で兄からの電話を受け、宋とともに張権宅に立ち寄ってから、三人で桂洞の呂運亨宅を訪れた。自宅で洪増植と話していた呂運亨は、三人を迎えて、夕刻に朝鮮軍参謀部にいる某氏が「明日正午を期して日本天皇の特別放送があるが、それはまさに日本の無条件降伏を伝えるものである」と知らせてくれたし、「少し前に」遠藤政務総監から「明日八時に自分の官邸に来てくれ」との伝言があったと語ったのである。さらに、呂運亨は「我々が一生かけて願い、かつ闘争してきた祖国の解放が来た。明日すべきことを議論しよう」と続けて、新聞業務に経験のある洪増植に毎日新報社を接収して号外を印刷し、ソウルだけでなく地方にも配布するように指示した。呂運弘には、放送局を接収して、朝鮮語だけでなく英語で海外にも放送するように命じた。柔道師範であった張権には、治安維持隊を組織するように指示した。これらを裏付けるものとして、呂運亨の次女である呂鶯九は、一四日夕刻に「朝鮮軍参謀部にいる建国同盟の秘密盟員」が訪れ、父に耳打ちして立ち去る

姿を目撃した。また、同じ頃、長崎所長から日本降伏を知らされ、あわてて桂洞を訪れた李欄に対して、呂運亨は「決死隊を組織しろ」と指示したとされる。さらに、一五日朝に桂洞を訪ねた李萬珪は息子の李貞求が食糧対策委員を招集する姿を目撃した。<sup>(6)</sup>

呂運弘の鮮明な記憶によれば、実業家の鄭亨黙が用意した自動車に乗って、呂運亨が大和町の政務総監官邸に向かったのは午前七時のことであった。約一時間後に帰宅したが、そのときには、組織関連の任務を担当する鄭栢を伴っていた。二人はそのまましばらく密談を続けた。遠藤から得た情報が二人の間で共有されたのだろう。後述するように、鄭栢はその日遅くにソウルで結成される朝鮮共産党（長安派）の幹部であり、二人の関係は呂運亨が共産主義者との連携を最も重視していたことを示している。その後、呂運亨は「情勢が変わった。遠藤の話では、朝鮮は分断されて、米ソ両軍が別々に占領するだろうし、漢江が境界となつて、京城はソ連軍の占領地域に入るだろう。だから、我々のすべての計画はそれに従つて変更されなければならない。放送も英語でする必要がないから、あわてずに事態を観察しながら、慎重にことを推進しなければならない」と述べたとされる。それを聞いた呂運弘はひどく失望し、後日、その遠藤の言葉が「解放されたその日からのさまざまな混乱の原因になり、とくに兄の心境に多くの変動を引き起こした」「問題の焦点は我々の国土が分断されるという点にあったというよりも、それが漢江を境界にして両断され、我々の首都ソウルがソ連軍の占領地域に含まれるだろうという点にあった」（傍点引用者）と回想した。ただし、日本側には、遠藤が分割占領や漢江境界線について語ったの記録は存在しないし、この時点では、まだ三八度線の設定作業は完了していなかった。呂運弘の記憶に混乱が生じたのだろう。<sup>(7)</sup>

## 2 建国準備委員会の結成——建国運動の出発点

八月一日正午の玉音放送を聴いた後、遠藤柳作と呂運亨の会談を知った朝鮮人が、呂運亨宅の近くにある徽文中学校の校庭に集まって、万歳を叫んだり、歌を歌ったりした。呂運亨は自宅で李如星、金世鎔、李康国、朴文圭、梁在厦、李相佰、李萬珪らに囲まれていた。呂運弘、鄭栢、崔容達もいた。彼らを前に、呂運亨は「日帝が敗亡し、いまだに政府が樹立されない空白期に、人民を正しい道に引導するために、解放政局を正面から捉える政治組織をつくることが望ましい」「そのような政治組織には共産主義者も独立運動者も網羅されなければならないが、この席には民族主義者の代表がない」と指摘して、安在鴻と提携する必要性を説いた。安在鴻はその日の午後呂運亨宅を訪れ、四時頃には約四〇名の学生たちに「ようやく我々が国のために仕事をするときが来た」と熱弁を奮って、最後に「大韓独立万歳！」と叫んだ。これが解放後初めての「独立万歳！」であった。その後、呂運亨と安在鴻は同じ桂洞の林龍相所有の洋館に移って、そこで朝鮮建国準備委員会を結成した。その名称は安在鴻が命名した。呂運亨が委員長に、安在鴻が副委員長に就任したのである。八月一六日未明に開かれた数人だけの会合で、安在鴻は「新幹會当時の民・共（民族主義者と共産主義者の）分裂を継承することなく、左派がうまく協同できるか」（括弧内引用者）と質問すると、呂運亨と鄭栢は「絶対に心配ない」と応じたとされる。呂運亨は左右両派を網羅する統一戦線的な組織として建国準備委員会を結成して、その中心で左右の均衡を取る役割を演じようとしたのだろう。一六日朝には、朝鮮民衆に「重大な現段階において、絶対の自重と安静」を要請し、「指導層の布告に従う」ことを訴えるビラが、朝鮮建国準備委員会の名義でソウル市内の要所に張り出された。<sup>(8)</sup>

八月一日正午に玉音放送を聴いても、大多数の朝鮮人はその意味を正確に理解できなかった。あるいは、すぐには反応しなかった。大きな変化が現れたのは一六日になってからのことである。前日とは一変して、多くの人々が朝から広場や大通りに集まり始めたのである。午前九時には、京城放送局を接收するために、建国準備委

員会から派遣された学生たちが朝鮮人職員の業務を警護する態勢に入った。同じ頃、呂運亨は青年や学生に人気のある二人の共産主義者、すなわち李康國と崔谷達を伴って西大門刑務所を訪問し、政治犯と経済犯の釈放に立ち会った。長崎祐三、白允和両氏も、それに同行した。刑務所の講堂に集められた受刑者に対して、呂運亨は解放の日が来たことを告げ、遠藤と約束したように、朝鮮と日本の両民族の将来のために軽率妄動しないように説得した。刑務所の外側では、「革命同志歓迎」の大旗を掲げて、数千人の人々が独立門から刑務所前までを埋め尽くしていた。すでに全国の刑務所と警察署に対して、思想犯、経済犯、労務関係違反者の全員釈放が指示されていたのである。受刑者の家族たちは、日中にもかかわらず、ろうそくに灯をともして待機した。ろうそくには「朴憲永同志よ、早く現れよ」など、共産主義者の名前を書いたものも散見された。一五日、一六日に全国で一万余人の既決および未決政治犯・経済犯が釈放されたのである。呂運亨らは、その後、京城刑務所に向かった。<sup>(9)</sup>

さらに、同日正午、徽文中学校庭に集まった青年や学生に対して、呂運亨が朝鮮建国準備委員会委員長として遠藤政務総監との会談について報告した。それによれば、遠藤の要請は「過去に朝鮮と日本の二民族が合邦したことが朝鮮民衆にとって適当であったか否かについては触れることなく、ただ互いに別れる今日に当たって気持ちよく別れよう。誤解から血を流したり不祥事が起きたりしないように、民衆をよく指導してほしい」というものであった。他方、呂運亨は(一)朝鮮各地で拘束されている政治犯と経済犯の即時釈放、(二)三カ月間の食糧の確保と引渡し、(三)治安維持と建設事業への不干渉、(四)学生の訓練と青年の組織に対する不干渉、(五)労働者の建設事業への協力と苦痛からの解放の五つを要求した。また、呂運亨は群衆に「我々が過去に被った痛みはこの場ですべて忘れ去ろう」「白旗を掲げた日本の心中を見極めよう。もちろん我々の痛快さは禁じえない。しかし、彼らに対して我々の雅量をみせよう」と訴えた。その頃、どこからともなく、「午後一時ソ連軍入城」の声が伝えられた。「解放のソ連軍きたる!!」の旗や幟を持ち、「解放軍万歳」「ソ連軍万歳」を叫ぶ群集が京城

駅に向かったのである。南大門から京城駅にかけての一带はすでに人波で埋め尽くされ、ソ連領事館には問い合わせの電話が殺到した。呂運亨は京城駅には向かわなかったが、ソ連軍を歓迎する演説文を作成したり、贈り物を準備したりすることに余念がなかった。<sup>10)</sup>

他方、同日午後三時から約二〇分間にわたって、呂運亨に代わって安在鴻副委員長が京城放送局を通じて演説した。それは同日午後七時と九時にも繰り返され、その全文が翌日の『毎日新報』に掲載された。しかし、その内容は明らかに治安維持への協力の枠を超えていた。冷静であるべき総督府がその内容を検閲することを怠ったのである。事実、その演説冒頭において、安在鴻は各界を代表する同志が「朝鮮建国準備委員会を結成し、新生朝鮮の再建設問題に関して、最も具体的に実地的な準備作業を始めることになりました」と宣言していた。また、「旧い政治と新しい政治がまさに交代する時に当たり、ともすれば大衆は去就に迷い、進退を誤ることがあります」と指摘し、「誠実果敢かつ聡明周密な指導によって人民を把握統制する」必要性を強調して、「朝鮮・日本両民族が自主互譲の態度を堅持して少しでも摩擦がないように、日本人住民の生命財産を保障する」との方針を明示した。さらに、そのために建国準備委員会所属の学生青年警衛隊を置いて、一般秩序を維持すること、警武隊、すなわち正規兵の軍隊を編成すること、食糧を絶対に確保する計画を立て、運搬および配給体制の現状を維持すること、八月十五日、一六日に一〇、六〇〇人の未決・既決政治犯を釈放したこと、行政一般の接収も遠くないことなどを明らかにしたのである。<sup>11)</sup>

この放送を聴いた朝鮮人の一部は、総督府が解散して新政府が樹立されるものと解釈し、警察署や派出所を占拠して「警衛隊」の看板を掲げたり、京城日報、同盟通信京城支局などの新聞社・通信社、会社、工場、大商店、大学、専門学校などを接収したりした。警察官の七割以上が朝鮮人であったために、すでに警察機能が無力化していたのである。ただし、呂運亨や安在鴻の説得が功を奏したためか、警察署その他の行政官庁の占拠や銃火器

の略奪にもかかわらず、それに伴う大規模な流血の惨事は発生しなかった。警察官に対する殺害・殺傷事件は最初の一週間に集中したが、日本人警察官に対するものは八件（殺害二件と傷害六件。その他に自殺六件）にとどまった。他方、朝鮮人警察官に対する殺害・殺傷事件は四五件に達した。朝鮮人による暴行の多くは警察官および郡面の官吏を対象とするものであり、その多くは労務や食糧供出などと関連する「個人的な怨恨関係」によるものとみられた。事実、その後の治安隊や保安隊の活動には、日本人から感謝されるものも少なくなかったのである。九月初旬の『京城内地人世話會々報』には、岡久雄・京畿道警察部長が「治安隊がこの難局に挺身し、我々と同じ抱負を持つてよく協力してくれているのは感謝にたえぬ。これらの内の一部に不良分子あるやの風評もあるが……治安隊の名を借りて横暴を働いたものと思う」と語る記事が掲載された<sup>12</sup>。

しかし、事態を憂慮した遠藤政務総監は、一七日夜、長崎祐三に連絡して呂運亨に「接収は連合三国によってなされるべきものであるから、建國準備委員会の活動は治安維持協力の限界にとどめるよう」に伝えるように指示した。また、翌日午後、西広警務局長も安在鴻と面会して、放送内容が治安維持への協力という範囲を逸脱していることを指摘して、建國準備委員会を解消するように説得したが、安はそれに応じなかった。さらに、一九日になって、総督府当局者は安在鴻の演説内容を修正する談話を発表し、朝鮮建國準備委員会の使命は「総督府行政の治安維持に協力する」ことであると指摘し、「正規軍の編成」「行政機関の接収」などは連合国代表との折衝によって決定されるものであると主張した。遠藤政務総監もまた、ポツダム宣言に基づいて「統治権の授受」が連合国との間でなされることを強調し、それまでの間、統治の責任とそれのための施設は総督府の手中にあると主張し、一般民衆に「絶対に冷静たれ」とする談話を発表した。しかし、朝鮮軍管区司令部の対応は厳しかった。遠藤・呂運亨会談について事前に通知されなかったことに抗議し、一六日、「人心を攪乱し、治安を害する」ことがあれば、「軍は断乎たる措置をとるの已むなきに至るべし」とする布告を発表したのである。一七日早朝か

ら、京城放送局は軍隊によって警備された。さらに、一八日夜、朝鮮軍管区報道部長も「朝鮮軍は厳として健在である」と放送し、「食糧を壟断し、交通通信機関の破壊または掠奪横領を企て、治安を害せんとする匪賊的行為」に警告を發した。それに加えて、終戦時に約一万三千人の定員を約六千人にまで減少させていた日本人警察官を補充するために、総督府は約四千人の日本人警察官の軍隊への召集を解除し、さらに九千人の軍人を警察官に転属させて「特別警察隊」を編成した。こうして、一七日以後、警察署、官庁、新聞社などの接収が解除されたのである。<sup>13)</sup>

### 3 呂運亨と宋鎮禹——左右対立の原型

朝鮮総督府といま一人の朝鮮人指導者宋鎮禹との接触は、遠藤政務総監と呂運亨の会談に先立って、八月一日から数回に及んだ。すでにみたような観点から朝鮮人指導者の協力が必要として、西広忠雄警務局長は岡久雄・京畿道警察部長に穩健な右派民族主義者であり、日本への長期留学の経験をもつ宋鎮禹の説得を命じたのである。それについての記録は必ずしも細部が一致しないが、宋鎮禹自身の説明によれば、八月一日（おそらく八月一日の誤り）に総督府警務局の原田事務官の来訪があり、国際情勢の急変について説明を受けて、治安維持のための協力を要請された。つづいて、一二日に朴錫胤から連絡があり、指定された日本料理店を訪れると、軍參謀の神崎大佐や慎鏞鎬が待機していた。そこでも、ソ連軍が豆満江を越え、羅津、雄基、清津が爆撃されたことを告げられ、総督府への協力を要請された。そして、最後の会談が一日に京畿道知事室で開催された。旧知の生田清三郎知事が宋鎮禹を直接的に説得したのである。会談に同席した岡警察部長は、そのとき、宋鎮禹に「承諾してくれば、治安維持に必要な権限を委ねる」と約束したとされる。生田は宋の三〇年来の友人であり、この年の三月頃に会ったときにも、宋に「戦争が（日本の）敗北で幕を閉じることを覚悟しており、朝鮮が独立

するかもしれない」(括弧内引用者)と語っていた。しかし、宋が生田の説得にも応じなかったために、岡警察部長は学生や青年に人気のある金俊淵との面談の斡旋を依頼した。漣川から上京していた金俊淵は翌日午前九時頃に京畿道庁に生田知事を訪ねたが、その回答も同じであった。<sup>(14)</sup>

宋鎮禹が戦争末期に最も恐れていたのは、前途に希望を失った日本人が自暴自棄になり、朝鮮人指導者の身边が危険にさらされることであった。生田知事と会談した宋はその足で湖南財閥(普成グループ)の総帥であり、最大の盟友である金性洙を訪れて、生田知事との会談内容を説明するとともに、「今日、明日が峠になるから、貴兄は漣川に下っているほうがよい」として、別邸に身を隠すように勧めた。また、宋鎮禹は総督府から与えられる「自治」や「独立」を警戒し、「大策は無策である」として、金俊淵らの側近にも軽挙妄動を戒めていた。前年秋、安在鴻が宋鎮禹を訪れて、「朝鮮人が軍人として出かけ、血を流しているのだから、その血の代価を得なければならぬのではないか」「何らかの運動を起こして、多少の権利でも得なければならぬのではないか」と問いかけたときにも、宋は「我々が動けば、動くだけ日本の掌中に引き込まれるだけだ」「他の者が血を流し、その代価は自分で受け取るというのか」と反論し、自らは苑洞の自宅に引き籠ったのである。八月一三日の生田知事との会談でも、宋鎮禹は「もし私が汪兆銘やペタンになったら、あなた方が日本に発った後で、私は朝鮮民族に発言権を失ってしまうのではないか……正しい知日人士を一人ぐらい残して置かなくてはいけないのではないか」と反論したとされる。<sup>(15)</sup>

しかし、呂運亨は宋鎮禹の消極的な態度に不満であった。また、総督府への対応だけでなく、二人の間には上海から重慶に移転した大韓民国臨時政府についての評価に大きな落差が存在した。宋が臨時政府要人の帰国を待たずに建国に向かう呂運亨の態度を国論の分裂をもたらすものと考えたのに対して、呂運亨は臨時政府を絶対的な存在と見なしていなかったのである。そもそも、呂運亨は一九一九年の三・一独立運動の導火線となった金奎

植のパリ講和会議への派遣について、張徳秀とともに大きな役割を果たしていた。その後の上海で、呂運亨は臨時政府よりも独立運動団体を組織することを主張したが、臨時議政院の設立に参加して、初代の外務部委員長に就任した。しかし、臨時議政院の「皇室優待」やその後に樹立された臨時政府の官制に反対し、やがて李承晩や安昌浩を批判して、いま一人の中心的指導者であった李東輝の組織する高麗共産党に身を投じた。一九二二年一月には、モスクワで開催された極東勤労者大会に朝鮮代表として出席し、レーニンやトロツキーとも会見した。また、コミンテルンから派遣されたヴォイチンスキー (Voitsinski, Grigori Naumovich)、ボロディン (Borodin, Mikhail Markovich) にもたびたび接触し、中国の革命運動家との交流も孫文、汪精衛、汪兆銘、毛沢東、周恩来などに及んだとされる。しかし、一九二七年七月に上海で逮捕され、一九三二年七月まで朝鮮で投獄された。このような輝かしい革命運動の経歴のために、呂運亨は新政府の樹立をあえて臨時政府に委ねようとしなかったのだらう。<sup>(16)</sup>

しかし、すでに指摘したように、呂運亨は建国運動を排他的に推進しようとしたわけではない。それどころか、国内の幅広い支持を獲得するために、呂は安在鴻や宋鎮禹などの民族主義者との提携が必要であると考えていた。李萬珪によれば、釈放後の中央日報社長時代に、呂運亨は「今日、朝鮮内で表面に現れた勢力としては、キリスト教、天道教などの宗教団体を挙げる事ができるが、その他に金性洙のグループがある。東亜日報、普成専門、中央学校、紡織会社、織組会社がすべて金の系統である。その事業はすべて立派である。今後、いかなることがあっても、このグループが相当の勢力をもつことを侮ることができないだろう」と主張していた。呂運亨が指摘するように、金性洙は日本統治下の朝鮮に誕生した新しいタイプの企業家であり、全羅北道古阜郡の小地主が始めた事業を京城紡織、東亜日報、普成専門学校（後の高麗大学）などを傘下に置く産業資本に発展させた。その金性洙にとって、宋鎮禹は一緒に日本に留学した親友であり、中央学校校長や東亜日報社長を務めた同志であり、

また政治的な立場を同じくする代弁人でもあった。しかも、彼らは義兵運動や革命運動に身を投じるよりも、むしろ殖産興業や教育振興によって「自強」(実力培養)を達成するという慎重な民族運動を選び、階級的利益と愛国心の葛藤に悩まされてきたのである。したがって、二度にわたる投獄や東亜日報の廃刊にもかかわらず、宋鎮禹は日本の植民地産業政策の恩恵を受けた自分たちの立場が政治的に微妙であると感じていたのかもしれない。しかし、その金性洙と宋鎮禹の周囲には、日本や米国に留学した多くの有能な人材、中央と地方の実業家や資産家などが集まっていたのである。<sup>(17)</sup>

いずれにせよ、建国準備委員会の発足に際して、呂運亨は宋鎮禹との提携を熱心に試みた。事実、八月一四日の生田知事との会談後、金俊淵は呂運亨と行動を共にする鄭栢の訪問を受け、宋鎮禹側との提携を打診されたと言言している。それによれば、鄭は「宋鎮禹氏側と呂運亨氏側が提携すれば、国内において対抗できるだけの勢力がないから、そのことを宋鎮禹氏と金性洙氏に話してくれ」と要請した。金俊淵はその日のうちにそれを伝える理由になったのである。左翼系の『朝鮮解放年報』は、金俊淵と鄭栢が八月一二日と一三日に会談し、呂運亨側が「国内で敵と抗争した人民大衆の革命力量を中心として、内外地革命団体を総網羅して独立政府を樹立する」と主張したのに対して、宋鎮禹側は「在重慶金九政府を正統として歓迎、推戴する」と反論したと記録している。また、八月一五日に上京して宋鎮禹宅を訪れた李仁は、宋から生田知事との会談および呂運亨側との協議の経緯を知らされて不安を覚え、その場で「民族的大事を同志たちと一言の相談もなく、独断で拒絶したのは誤った取扱い」であり、呂運亨に自分を唯一の指導者として宣伝する機会を与えてしまったと指摘した。翌日、李は桂洞を訪れ、呂運亨と安在鴻に宋鎮禹との再交渉を促した。<sup>(18)</sup>

事実、金俊淵からの回答が否定的であったにもかかわらず、呂運亨は宋鎮禹に対する説得作業を継続した。八

月一五日に別の側近である李如星を宋のもとに派遣し、一七日午後には自ら宋鎮禹を訪問した。双方の記録から再構成すれば、このとき、呂運亨は「あなたの目からみて、私の出発に誤った点があったとしても、国家の大事であるから、虚心坦懐になり、大衆の信望を大切に、大事の前の蹉跌がないにせよ」と要求し、強く共同行動を迫ったとされる。しかし、宋はこれら一連の説得を強く拒絶した。呂との会談では、その理由を「政権は国内にいる我々が受けるものではなく、連合軍が入り、日本軍が退き、海外にあった先輩たちと手を握った後に、手続きを踏んで受けるのが正しい」と主張した。また、宋鎮禹は「そのときになって、夢陽に考えがあれば、私が極力夢陽を推戴するので、現在は政権の樹立を保留していただきたい」と要請した。これに対して、呂運亨は「なぜ必ず海外にいる人々とともに政権を受け取らなければならないのか。古下と私が手を結びさえすれば……海外から帰ってくる勢力も我々のなかに吸収されるだろう」と反論したとされる。呂運亨と宋鎮禹の情勢認識には、解放直後から埋めがたい溝が存在したのである。<sup>19)</sup>

#### 4 建国準備委員会の左傾化——左派政権樹立への道

宋鎮禹の同意は得られなかったが、その後も建国準備委員会の活動は継続した。そもそも、建国のための呂運亨の準備は一年前、一九四四年八月一〇日に趙東祐、金振宇、李錫玖などの左派老壯層とともに「不言、不文、不明」を三原則とする秘密結社として朝鮮建国同盟を結成したときから始まったとされる。その後、一〇月までに建国同盟には李如星、許珪、金世鎔などが加入し、内務部、外務部、財務部の役割分担と綱領が決定され、各道を担当する責任委員も任命された。さらに、呂運亨は延安の朝鮮独立同盟との連携に努力し、一二月に李永善と李相白が北京で武丁からの連絡員と接触した。また、すでに一九四五年五月に、呂運亨は安在鴻と許憲に建国同盟への加入と副委員長への就任を要請したとされる。したがって、八月一五日に呂運亨宅に集合した者たちは

建国同盟の会員であり、李萬珪はそれを「招集令が下り、急いで跳んでいった」と表現した。しかし、それにもかかわらず、安在鴻は建国同盟の存在を知らなかった。呂運亨から「しつかりと秘密を守る二百余名の同志がいるので、地下で組織しよう」と提案されたことがあったが、それに関与しなかったと回想して、「一九四四年中に組織されたのだろう」と推測したのである。ただし、建国同盟についての証言が李萬珪一人のものであることから、その存在を疑問視する見解も少なくない。<sup>(20)</sup>

いずれにしろ、八月一七日、呂運亨委員長、安在鴻副委員長の下に、総務部、組織部、宣伝部、武警部、財政部の五つの臨時部署が組織され、それぞれの責任者に崔謹愚、鄭栢、趙東祐、崔容達、權泰錫、李奎甲が就任した。建国準備委員会の組織的な活動が開始されたのである。このうち、鄭栢、趙東祐、崔容達、權泰錫は有力な共産主義者であった。また、建国準備委員会の機関紙的な役割を演じた『毎日新報』は、八月一七日、建国準備委員会が「呂運亨委員長と安在鴻副委員長を中心に各界各層を網羅し円満かつ健全な組織となるために努力中である」と報じ、その使命を「これから新政権樹立のためにあらゆる準備をすることにあり、当面の課題としては治安確保に全力を尽くしている」と紹介し、さらに「これに対して十二分の協力がなければならぬ」と主張した。翌日、建国準備委員会は三千万の同胞に「建国工作」への積極的な協力を要請する声明を発表し、各地に「自治機関」として建国治安隊を組織する方針を示した。青年層や学徒を動員したり、警防団を改編したりするなど、それぞれの地方の有志を中心に、自発的、迅速、効果的かつ平和的に、それぞれの職場を守り、その協力を得ながら建国治安隊を組織し、それが完了したときに建国準備委員会本部に報告するように指示したのである。右派民族主義者たちが大衆的かつ組織的な基盤をもたず、政治活動の展開に慎重であったので、他に対抗団体が存在しないまま、建国準備委員会は解放直後の時期にほとんど唯一の権威ある政治団体として出現し、その利点を最大限に發揮することになった。建国準備委員会本部は地方から参集する「革命的人士」で溢れ、八月末まで

のわずか二週間に一四五カ所に地方支部をもつ全国的な組織に成長したのである。<sup>(21)</sup>

しかし、ちょうど建国準備委員会の活動が本格化した八月一日、呂運亨委員長が暴漢の襲撃を受けて、負傷するという事件が発生した。解放直後の重要な時期に、約一週間にわたって、呂運亨は楊州郡八堂で静養することとを余儀なくされたのである。しかし、八月二五日に帰京した呂は、委員会幹部たちに「時には多くの諸葛亮よりも一人の充実した兵卒が必要である」と指摘し、「我々がしようとしているのは、政府を組織することでも、何らかの既成勢力を形成することでもなく、もちろん何かの政権の争奪でもない。ただ新政権が樹立されるまでの準備をし、治安を確保するだけである」と演説して、従来の政治方針を再確認した。これが建国準備委員会の理念だったのである。それにもかかわらず、奇妙なことに、九月二日に建準書記局が発表した建国準備委員会の宣言と綱領（八月二八日付）の内容は、それと大きく異なっていた。呂運亨自身が大幅に加筆したとされるが、それらは建国準備委員会の当面の任務を「完全な独立と真真正正な民主主義の確立のために努力することである」とし、建国準備委員会を「国内の民主主義的な諸勢力」が渴望する「統一戦線」ないし「統一機関」と規定したのである。また、日本帝国主義と結託する「反民主主義的反動勢力」を排除して樹立される「強力な民主主義政権」は、「全国的な人民代表会議から選出された人民委員によって戦取される」（傍点引用者）と主張した。要するに、穏健な民族主義者を包含して発足した建国準備委員会が、突然、左翼的なイデオロギー、すなわち「民主主義民族統一戦線」論によって武装され、革命的な政権樹立を語り始めたのである。この頃から、共產主義者たちが委員会の主導権を掌握し、人民政権の樹立に向かったのだらう。<sup>(22)</sup>

さらに、この宣言には二つの注目すべき文言が含まれていた。その第一は「一時的に国際勢力が我々を支配するだろうが、それが我々の民主主義的要求を助けることはあっても、妨害することはないだろう」（傍点引用者）との指摘である。南朝鮮の政治勢力がいつ、どのように三八度線による分割占領や米軍の進駐を知ったのかは必

ずしも明確ではないが、この頃までには、呂運亨もソウルを含む三八度線以南の朝鮮に米軍が進駐すると結論に到達していたことだろう。『毎日新報』は八月二四日に「朝鮮に関しては、自由独立の政府が樹立されるまで、米国とソ連の分割占領下に置き、各々が軍政を施行するものとみられる」（東京発・同盟通信）と伝え、その記事を立証するかのようになり、八月二三日に三八度線のやや南側に位置する開城に侵入したソ連軍は、そこで停止してソウルへの進撃を中止してしまつたのである。なお、朝鮮総督府は八月二二日に本国政府内務次官から「(日本)軍の武装解除担当地域は北緯三十八度以北がソ連軍、以南は米軍に為る見込み」(括弧内引用者)との予告電報を受領し、翌日の局長会議で、阿部総督がそれへの対処方針を指示した。また、宣言文中で第二に注目されたのは、「これまで海外で朝鮮解放運動に献身してきた革命戦士たちとその集結体に対しては、適当な方法によつて心から迎えなければならぬ」(傍点引用者)との指摘である。しかし、それにもかかわらず、そこには重慶に存在する大韓民国臨時政府の名称も、李承晩や金九の名前もなかった。言い換えれば、この宣言は臨時政府を自分たちの「政府」とはみなしていなかったし、著名な独立運動指導者たちを国内で組織される人民政権に推戴される存在にすぎないと考えていたのだらう。<sup>(23)</sup>

ところで、このような建国準備委員会の左傾化は、その間に進展した朝鮮共産党の再建と密接に関係していた。すでに指摘したように、当初、呂運亨は解放直後に結成された長安派朝鮮共産党の鄭栢、権泰錫、尹亨植などと提携して、建国準備委員会の組織化を進めた。しかし、後述するように、朝鮮共産主義運動の中心的な指導者である朴憲永が八月一八日に地方の潜伏先からソウルに到着し、二〇日に朝鮮共産党再建準備委員会を開催して一般政治路線に関する暫定テーゼを採択した。それに基づいて、再建派共産主義者たちによる建国準備委員会への浸透が開始されたのである。ただし、八月二二日、建国準備委員会は一局(書記局)一二部(食糧部、文化部、交通部、建設部、企画部、厚生部、調査部を追加、武警部を治安部に改称)に拡大改編されたが、その構成をみる限り、

「中道左派と中道右派が中心になり、左右が同じように配置」されていたし、何人かの長安派共産党幹部がそのまま含まれていた。また、民族主義右派の咸尚勲や金俊淵の名前もみられた。したがって、建国準備委員会の「左傾化」が組織面で確認されるのは、後述する九月四日および六日の拡大改編以後のことである。他方、安在鴻副委員長は早い段階から呂運亨が共産主義者との提携を重視することに不満を抱いていた。建国準備委員会発足から三日目の八月一八日に、安は呂と二人だけの長時間の会談をもって、呂運亨の意図するものと安在鴻の抱負である民族主義陣営主導の建国方針との間に相当に距離があることを確認したのである。後日、安在鴻は二人の提携は「この日にほとんど決裂した」と語った。その後、安在鴻は八月末に八堂を訪れたが、そのときには二人だけの会談を警戒する崔容達と鄭栢が同席したために、何の成果も得られなかった。<sup>(24)</sup>

事実、呂運亨が休養する間に建国準備委員会内の左右対立は激化していた。委員長の職務を代行する間に、安在鴻は金炳魯などとともに全国的に一三五名の「詮選委員」（拡大委員）を選定して、建国準備委員会を民族主義陣営が主導する形に再編することを企図したのである。しかし、再建派共産主義者の側は安在鴻と鄭栢、權泰錫、尹亨植らの長安派共産主義者の関係を問題視した。また、この頃までに米軍の南朝鮮進駐が確実になったことが、右派民族主義者や安在鴻の建国準備委員会に対する態度に少なからず影響を及ぼしたとの指摘もある。いずれにせよ、建国準備委員会書記局は一三五名の拡大委員に九月二日午後五時に委員会を開催する旨の通知を送した。しかし、混乱はさらに拡大した。呂運亨が八月三一日に緊急執行委員会を招集して辞表を提出し、安在鴻副委員長と各部の責任者もそれに続いたのである。九月二日に書記局が発表した前述の建国準備委員会の宣言と綱領は、おそらく安在鴻のクーデターの的な工作に対する左派陣営の巻き返しだったのだろう。結局、この問題は九月四日に開催された第一回拡大委員会で処理された。そこで、呂運亨と安在鴻の留任が決議され、さらに副委員長に許憲が追加されたのである。また、新しい中央執行委員の選出は三人の正副委員長に一任された。<sup>(25)</sup>

しかし、その過程で生じた亀裂は修復不可能であった。副委員長への留任が決議された安在鴻は、すでに九月一日に「重慶政府の絶対支持」「建国準備と治安維持」を掲げて発足した朝鮮国民党の委員長に就任していたのである。また、九月一〇日、安在鴻は「朝鮮建国準備委員会と余の処地」と題する声明を発表して、「建準は政綱を持つ政党でもなく、その運営者自身のための組閣本部でもなく、さらに多年の間海外で解放運動に尽瘁してきた革命戦士たちの指導的結集体である海外政権と対立する存在でもない」と主張し、副委員長を辞任する意思を再確認した。建国準備委員会の各部責任者についての新しい人事は九月六日に決定されたが、すでに新しい国家と政府を樹立するための計画が進行していたので、その中央人事が決定されるまでの間の暫定的な人事としての性質が濃厚であった。副委員長長の安在鴻が許憲と交代し、長安派共産党の鄭栢と尹亨植が組織部の責任者を退き、代わって再建派共産党の李康国が登用された。財政部の責任者に朴憲永の側近の金世鎔が指名されたが、長安派共産党幹部の崔益翰も治安部の責任者に就任した。安在鴻が離脱したために、呂運亨と朴憲永の提携はさらに強化されたが、長安派共産主義者の影響力が部分的に残存し、右派民族主義者たちが完全に離脱したのである。しかし、朝鮮日報を基盤にする有力な民族主義者であり、総督府への非協力を貫いた安在鴻が離脱したために、建国準備委員会が実質的に「左派片肺の統一戦線」になったことは否定できなかつた。<sup>(26)</sup>

## 5 右派勢力の結集——韓国民主党の行動方針

建国準備委員会の左傾化や安在鴻の建国準備委員会からの離脱は、米軍の進駐が確実になるなかで、九月初めまでに南朝鮮内の左右対立を決定的にした。これ以後、呂運亨は右派民族主義勢力と決別し、朴憲永を中心にする共産主義者との提携を強化して、米軍の進駐予定日の前日、すなわち九月六日に「朝鮮人民共和国」を樹立したのである。他方、右派民族主義勢力の中心的な指導者である宋鎮禹は、民族主義勢力を網羅する国民大会を開

催するための行動を開始した。九月四日には、金性洙、徐相日、金俊淵、薛義植、張相澤などが鍾路の中央基督教青年会館内で会合して、「大韓民国臨時政府および連合軍歓迎準備会」を組織したのである。また、朝鮮人民共和国が樹立された九月六日、大韓民主党と韓国国民党を中心に、金炳魯、白南薰、元世勲、金度演、趙炳玉など、約七〇〇名の右派民族主義者が集合して、韓国民民主党発起人会を開催した。さらに、宋鎮禹、徐相日、元世勲、金性洙、金炳魯、金俊淵、李仁、白寬洙、尹致暎、張德秀、張澤相などは、九月七日に東亜日報本社講堂で国民大会準備会を開催して、「国民の総意によつて、わが在重慶大韓民国臨時政府の支持を誓約する」ことを決議した。また、米軍がソウル進駐する八日には、約六〇〇名の韓国民民主党発起人が名前を連ねて、「(呂運亨は)総督府政務總監から治安維持に対する協力の依頼を受け……あたかも独立政権を樹立する特権を託されたかのよう、四、五人でいわゆる建国準備委員会を組織して、新聞社を接収したり、放送局を占拠したりし、国家建設に着手したことを天下に公布した」(括弧内引用者)と非難し、「昨日、ついに反逆的ないわゆる人民大会なるものを開催して、『朝鮮人民共和国政府』を組織した」と糾弾する声明書を發表した<sup>(27)</sup>。

しかし、その声明書のなかで最も興味深いのは、「大韓民国臨時政府を迎えて、この政府をして一日も早く四国共同管理の軍政から完全な自由独立政府になるように支持し、育成しなければならぬ」と主張した部分である。なぜならば、そこに、韓国民民主党に結集する右派勢力の重要な情勢評価と行動方針が明示されていたからである。要するに、米軍のソウル進駐が明確になった後、この政治勢力は第一に重慶にある大韓民国臨時政府を將來の自由独立政府の主体として想定し、第二に当面は米ソ英中による「四国管理の軍政」が実施されるものと考え、そして第三に重慶臨時政府を支持し、育成することを自分たちの政治的な役割として認識していたのである。言い換えれば、そのような情勢認識と行動方針を確認しつつ、すでに発足していた韓国民党(張德秀、白南薰、尹普善、許政、尹致暎、金度演ら)や朝鮮民族党(金炳魯、白寬洙、元世勲、趙炳玉、宋南憲ら)の指導者とともに、

宋鎮禹は保守的な民族主義勢力を総結集して韓国民主党を結成しようとしたのである。韓国国民党から参加した金度演は、それを「左翼系がいわゆる人民共和国というものを宣布したので、我々民族陣営では早く大同団結しなければならぬ」との精神で、国民党、民族党、国民大会準委など、三者が連合して韓国民主党を組織するに至った」と表現した<sup>(28)</sup>。

しかし、それにしても、重慶政府の絶対支持と米占領軍当局への協力は矛盾しなかったのだろうか。その点について、宋鎮禹はやがて「現下の朝鮮の実情は政治的訓練の時期だと考える。軍政下にある朝鮮の政党とは、対民衆の政治的訓練機関である」「重慶にある臨時政府を国内でお迎えしても、彼らは帰ってきて一人、で、何かできるものではない。」(傍点引用者)と語つたし、張徳秀はもつと率直に「軍隊と警察力がない政府は役に立たない。私は現在の朝鮮国内には政府が必要ないと考える」(傍点引用者)と断言した。韓国民主党の幹部たちは「韓国は軍政段階の訓政期を持たなければ治安を維持することができず、また朝鮮半島全体の赤化を免れない」との結論に到達して、米占領軍当局に協力することを決意したのである。左派勢力の大衆的な基盤を突き崩すために臨時政府の絶対支持を掲げたが、韓国民主党の行動方針の力点はむしろ米軍政府に積極的に協力し、南北朝鮮の統一管理と国際管理を円滑に実現することにあつた。そして、それこそ自らの保守的な政治基盤を固めるための方法であると考えたのだろう。しかし、「軍政段階」をある種の「訓政期」とする情勢認識は、朝鮮独立を段階的に実現する道ではあつたが、左派勢力の建国運動と正面から衝突するだけでなく、大韓民国臨時政府との関係にも「不信の種」をまきこむことになつた。<sup>(29)</sup>

韓国民主党の結党式は、九月一六日午後、慶雲洞天道教大講堂に約一六〇〇名の黨員を集めて挙行された。白南薫の開会辞、金炳魯議長長の選出の後、元世勲が提議した臨時政府要人とマッカーサー元帥に対する感謝決議を満場一致で採択した。また、李仁が米軍政当局に南北行政の統一と公正・有為の朝鮮人の官吏採用を要請するこ

とを建議して、採択された。それらはいずれも米国および米軍政府の基本政策と合致するものであった。その後、金度演による保守政党的合同についての経過報告と趙炳玉による国際および国内情勢報告を聴取し、宣言、綱領ならびに政策を決定した。綱領には「朝鮮民族の自主独立国家の完成を期する」ことが謳われ、政策では「重工業主義の経済政策」、「主要産業の国営または統制管理」、「土地制度の合理的再編成」、「国防軍の創設」などが掲げられた。最後に、金炳魯議長から党機構について説明があった。やがて海外から帰国する七名の独立運動指導者、すなわち李承晩、徐載弼、金九、李始榮、文昌範、権東鎮、呉世昌を「領袖」に推戴し、その下に全国各道から地域的に選抜した「総務」を置く一道一総務の集団指導体制が採られたのである。そのような方針の下で、三〇〇名の代議員と八名の総務、すなわち宋鎮禹（全羅南道）、白寛洙（全羅北道）、元世勲（咸鏡道）、白南薰（黄海道）、徐相日（慶尚北道）、金度演（京畿道）、張炳玉（忠清道）、許政（慶尚南道）が選出された。また、宋鎮禹が首席総務に推戴され、まもなく金東元（平安道）が総務に追加された。さらに、事務局長（羅容均）と中央監査委員会委員長（金炳魯）のほかに、外務部長（張徳秀）、宣伝部長（咸尚勲）、組織部長（金若水）、文教部長（李寛求）など、一三名の部長が決定された。<sup>30</sup>

## 二 朝鮮人民共和国の樹立と米軍政府の対応

### 1 朴憲永と朝鮮共産党の再建

呂運亨、安在鴻そして宋鎮禹を中心にする左右の民族主義勢力のほかに、解放後の南朝鮮政治に大きな影響力を及ぼす国内政治勢力が存在した。それは日本官憲の長期にわたる抑圧と懐柔を耐え抜いた共産主義者たちである。朝鮮共産主義運動はさまざまな原因から極めて複雑に展開したが、ここでいう共産主義者とは一九二〇年

代に朝鮮内で四次にわたって朝鮮共産党を組織し、その後も党再建のための活動を継続した革命勢力のことである。その中心的な指導者である朴憲永は、一九二二年五月に上海で金万謙、安秉讚らが主導する高麗共産党（イルクーツク派）に入党し、翌年四月に国内浸透を試みて逮捕され、一年六ヶ月の懲役刑に服した。一九二五年四月に火曜会系の金在鳳、金若水らとともに第一次朝鮮共産党の創立に参加し、党の青年組織である高麗共産青年会の責任秘書に就任した。同年一月に再び逮捕されたが、「心神喪失」と診断されて二年後に出獄し、療養中にウラジオストクに逃亡した。一九二九年一月から一九三一年末までモスクワの国際レーニン学校で学び、卒業後、一九三三年七月に党再建準備のために上海で活動中に逮捕され、六年間の懲役に服した。一九三九年二月から李観述と金三龍とともに、ソウルで「コム・グループ」と呼ばれる地下組織を組織して指導した。一九四三年六月以後は、全羅南道光州市月山洞の煉瓦工場に労働者として潜伏し、第三者を通じてソ連領事館と秘密の接触を続けていた。解放当時四六歳で、一瞬たりとも休まない職業革命家であった。<sup>31)</sup>

しかし、八月一五日夜、まだ朴憲永がソウルに出現する前に、ソウル鐘路区の長安ビルで共産主義者たちの集会が開催された。また、それに続いて、李英、趙東祐、鄭栢、鄭在達、崔元澤などの九名の幹部たちによる会合が開かれ、それに二名を追加した一名が党幹部（中央執行委員）に選ばれた。さらに、秘書部趙東祐、組織部鄭在達、宣伝部鄭栢、政治部幹部全員など、主要部署の責任者も決定された。要するに、「革命が高潮する非常事態である」との理由で、その場で朝鮮共産党が組織されたのである。これがいわゆる「長安派」朝鮮共産党ないし「一五日党」である。朝鮮共産党が急造されたのも、呂運亨が急遽建国準備委員会を結成したのと同じ理由によるものだろう。すでに指摘したように、八月一五日早朝の遠藤政務総監との会談後に、呂運亨が最初に接触して二人だけの密談を交わしたのが鄭栢であった。このとき、二人の間で「ソ連軍のソウル入城」の情報が共有されたことは間違いない。言い換えれば、二人は機先を制して解放後の政局を主導することを決意し、そのため

に密かに提携したのである。そのように樹立された共産党は八月十七日には在京革命家大会を開催し、一八日には鄭栢が共産党の政策を発表した。さらに、京城地区委員会と共産主義青年同盟を組織し、平安南道の玄俊赫、黄海道の金徳泳を責任者に任命するなど、地方党の組織にも着手した。<sup>32)</sup>

他方、朴憲永は一七日に上京する建国準備委員会全羅南道代表を乗せた木炭トラックに便乗して光州を發ち、途中、釈放されたばかりの金三龍と全州で合流して、一八日にソウルに到着した。ただちに「コム・グループ」の同志や釈放された共産主義者たちを招集して、その日の夕刻に最初の会合を開いた。革命活動から離れていた共産主義者たちが機会主義的に朝鮮共産党を樹立したことを知り、それに対抗する朝鮮共産党再建準備委員会の結成を決意したのである。「コム・グループ」系の李觀述、金三龍、李胄相、金炯善、李鉉相など、一七、八名が集合したとされる。また、ソ連総領事館にいたシャブシーナ (Shabshina, Fania I.) の証言によれば、「解放から二、三日後のある日の午後」に、朴憲永は貞洞の領事館を訪れて、夫であるシャブシン (Shabshin, Anatoli I.) 副領事と会談し、解放後のソウル情勢や朝鮮共産党再建問題について夜更けまで議論した。そのときに、朴は党再建問題を自分に任せるように要請したとされる。シャブシンは朴憲永の革命経歴を知っており、その理論的水準を高く評価して積極的な支援を約束した。それ以後、二人は毎日のように「領事館近くの公園」で意見を交換するようになったとされる。<sup>33)</sup>

朴憲永らの共産主義者グループは、最初の会合の翌々日、八月二〇日に朝鮮共産党再建準備委員会を開催して、「現情勢と我々の任務——一般政治路線についての決定——」（いわゆる「八月テーゼ」）を採択した。これを執筆するために、朴憲永はソ連領事館の図書館で過去のコミンテルン文書、とりわけ第七回大会文書（一九三五年）を閲覧したとされる。しかし、「八月テーゼ」をみる限り、朴憲永はむしろ第六回大会（一九二八年）後にコミンテルン執行委員会が決定した朝鮮問題決議（いわゆる「一二月テーゼ」）の影響を強く受けていた。たとえば、「一

二月テーゼ」が最も重視したのは「農業問題の革命的な解決」であり、圧倒的多数を占める農民に階級意識を植え付けて、「労農民主独裁」によって「ブルジョワ民主主義革命」を達成することであった。事実、「八月テーゼ」において、朴憲永は「今日、朝鮮はブルジョア民主主義革命の段階にある。この革命の最も重要な課業は完全なる民族的独立の達成と農業革命の完遂、すなわち日本帝国主義の完全なる追放と土地問題を解決する新しい政権の樹立である。封建と資本主義の残滓を清算するためには、まず革命的に土地問題を解決しなければならぬ。大地主の土地を没収し、土地のない農民に分配しなければならない」と主張したのである。<sup>34)</sup>

しかし、興味深いことに、「八月テーゼ」の最後の部分は、単なる理論的な議論の領域を超えて、極めて実践的な内容を含んでいた。解放直後の八月二〇日に、朴憲永はすでに「労働者と農民の民主主義独裁」と「プロレタリアートのヘゲモニーの確立」を論じて、「政権のための闘争を全国的な範囲で全開しなければならない」と強調し、さらに「基本的な民主主義的要求を掲げ、これを徹底的に実践できる人民政府を樹立しなければならない」と主張したのである。そのために、「『政権を人民代表会議に』との標語を掲げて、進歩的民主主義のために闘争する」ことを要求した。しかも、このテーゼのどの部分にも、ソ連以外の連合国に対する言及は存在しなかった。呂運亨と同じく、この時点では、朴憲永もまたソ連軍がソウルに進駐するものと予想していたのだろう。したがって、このときに朴憲永が抱いていた朝鮮革命のイメージは、ソ連軍が進駐した東欧諸国で実現したように、左派民族主義勢力と提携して民族統一戦線のな人民政府を早期に樹立し、土地改革をはじめとするブルジョア民主主義革命に着手することであったに違いない。呂運亨と建国準備委員会こそ、共産党との政治的な連合の対象であった。事実、すでに指摘したように、八月二八日付の建国準備委員会の宣言と綱領には、「強力な民主主義政権」や「全国的な人民代表会議」などの表現を含めて、八月テーゼの影響が濃厚に存在した。建国準備委員会の「左傾化」は、再建派共産主義者たちの努力の結果にはかならなかったのである。<sup>35)</sup>

朴憲永にとって、いま一つの当面する最大の課題は、長安派共産主義者との派閥闘争に打ち勝って、統一的な朝鮮共産党を樹立することであった。したがって、「八月テーゼ」が長安派共産党に対する激しい批判を要求したのは当然であった。朴憲永は戦争中にも「国際共産党の路線を執行する共産主義運動が非合法的に大衆のなかで進行した」ことを強調し、日本官憲による大量検挙の圧力に屈して民族と労働階級を裏切り、「暗黒の時期に運動を放棄して平安な生活を送った」者たちを批判した。さらに、「揺るぎなく長期にわたって地下運動を実行している忠実な共産主義者たちの信頼できるグループがあることを知りながら」、彼らが「一九四五年八月一日に下部組織の創設や何らの準備もなしに『朝鮮共産党』を組織し、党中央委員の選出までして、有害な伝統的派閥活動を反復して、人民運動の最高指導者になろうと希望した」ことを痛烈に非難し、「この結果として、朝鮮共産主義運動が分裂した」と断罪したのである。したがって、「革命的な共産主義者たちはあらゆる力を合わせて、再び統一した朝鮮共産党を創設しなければならない」と指摘し、それこそ「現在、第一となる最も重要な課業」であると主張した。朴憲永を中心とする「コム・グループ」の地下活動は朝鮮共産主義運動の「一筋の清らかな流れ」であり、それこそ「国際路線」を反映していたとの主張が、朴憲永と再建派共産主義者の立場を著しく強化したのである。<sup>36)</sup>

朴憲永が「八月テーゼ」を発表したために、八月二〇日以後、多数の共産主義者たちが長安派共産党を離脱し、再建派への合流を主張した。また、そのような混乱した事態を收拾するために、八月二四日、長安派共産党は中央執行委員会を開催して共産党の解体を決定した。しかし、李英、崔益翰、鄭栢らの指導者が無条件解体に反対したために、さらに九月一日と六日に再び会合して、李承燁、安基成、李廷允の三人を折衝委員として朝鮮共産党再建準備委員会に派遣した。二つの共産党組織を統合し、長安派共産党幹部を再建される共産党の中央委員人事に含めるための努力だったのだらう。しかし、三人は朴憲永に候補者名簿を提出するとともに、最終的な人事

権を委任してしまった。そのような過程を経て、九月八日に、長安派共産党の有力者約六〇名を集める重要な会議が桂洞の洪増植宅で開催されたのである。これがいわゆる「桂洞熱誠者大会」であった。この長安派共産主義者の会議には、再建準備委員会を代表して朴憲永が招請された。<sup>(37)</sup>

しかし、集会は朴憲永の独壇場であった。第一に、朴憲永は「当面の最も緊急に必要な問題は朝鮮左翼の統一問題である」と指摘し、そのための「特別協議会」が成立し、それが最大限の包容力を発揮して、各団体、各派閥、各階級に接近し、信条、性別を超越して「最も広い範囲の統一民族戦線を結成するために努力し、その結果として『朝鮮人民共和国』を建設して、人民中央委員会を選挙し、発表した」と報告した。さらに、「これは確実に我が左翼陣営の大きな成功である」と強調した。後述するような経緯で、九月六日に樹立された「朝鮮人民共和国」が、再建派共産主義者たちによる左翼陣営統一のための努力の成果であると強調したのである。第二に、朴憲永は新しい共産党中央の組織原則に言及し、地下運動を継続した革命的共産主義グループと出監した戦闘的同志たちを中心に共産党が再建されること、さらに、党中央にはマルクス・レーニン・スターリン主義の理論で武装され、かつ戦闘的な経歴をもつ労働者および貧農出身者をできるだけ多く参加させることの二点を強調した。また、朴憲永は「過去の派閥領袖や運動を休息した分子は、いかに名声が高くても、今回の中央には入る資格がない」と付け加えた。これは明らかに長安派共産党幹部たちを指すものであった。<sup>(38)</sup>

その後の討論の過程で、長安派共産党の幹部たちが朴憲永の報告を批判し、二つの組織の対等な統合を主張したことはいうまでもない。李英は長安派共産党の最高指導部で(1) 全国統一、(2) 各サークルの統合のための具体的方法、そして(3) 原則的な統合を誓約したと主張した。しかし、李廷允は長安派共産党について「大衆の土台が皆無で、方針と規律がなく、小ブル的で派争的なので、解体を決議する」と主張した。最も強く抵抗したのは崔益翰であった。崔は再建準備委員会のテーゼ(八月テーゼ)を「改良的であり、経済主義的であり、

アナーキスト的である」と批判し、「どうしてこんなグループと統一することができるか」と宣言した。しかし、崔の批判も集会の大勢を変えることはなかった。その後、朴憲永は「一五日党に対する評価は、将来、革命理論家たちが党史を書く際に十分に討論されるだろう」とする結論を下した。それを聴取した後、趙斗元から（１）朴報告とその結論に原則的に賛成する、（２）党中央組織は労働者・農民の基礎組織をもつ共産主義グループと連絡し、協議して決定するが、その連絡は朴憲永に一任する、そして（３）党の建設が発表された後、党の基本的綱領と戦略および戦術を規定するために、早期に党大会を招集するように努力すると同時に、まず当面の課業を遂行するために行動綱領を早期に作成し、発表するとこの三項目が提案された。いずれの項目に対しても、李英、崔益翰、鄭栢など、五名の者が賛成の挙手に応じなかった。<sup>(39)</sup>

再建派朝鮮共産党中央組織の決定が朴憲永に委任されたために、それがいつ正式に発足したかは必ずしも明確でない。ただし、翌年三月に朴憲永代表（朝鮮共産党中央委員会総秘書）自身が執筆したとみられる「朝鮮共産党の再建とその現状」では、「あらゆる共産党組織の熱誠者たちの委任によって朴憲永は党中央委員会を結成した（九月一日）」と指摘された。また、朝鮮共産党中央委員会機関紙と銘打って九月一五日に創刊された『解放日報』は、冒頭に「朝鮮共産党はついに統一再建された」とする記事を掲げ、その最後の部分で、「統一された党の結成を発表すると同時に、朝鮮党機関紙『解放日報』は今日から創刊号を出すようになったことを宣言する」と記している。さらに、九月一九日の『解放日報』には、「朝鮮共産党の主張」と題して、「勤労人民の利益を尊重する革命的、民主主義的人民政府を確立するために闘う」など、四項目の行動綱領が掲げられた。しかし、趙斗元の提案にもかかわらず、ついに共産党大会が開催されることはなかった。朴憲永代表はむしろ「朝鮮人民共和国」を積極的に支持しつつ、民主主義民族統一戦線結成のための運動を強化し、さらに「労働組合全国評議会」、「全国農民組合総連盟」、「全国青年団体総同盟」などを結成して、労働者や農民の大衆運動を組織化するた

めに努力したのである。他方、崔益翰、李英などの長安派共産党幹部は、一〇月二四日、韓国民主党および朝鮮国民党と三党共同声明を発表して、「朝鮮人民共和国」を厳しく批判して、重慶にある大韓民国臨時政府を積極的に支持することを決議したが、一月二三日になって、その態度を二転し、長安派共産党の解消と再建派共産党への合流を宣言した<sup>(40)</sup>。

## 2 朝鮮人民共和国の樹立——機会主義

九月初めまでに安在鴻らの右派民族主義者が完全に脱落していたので、左派民族主義者と共産主義者による新しい国家の樹立はあつてなかつた。九月六日午後七時、翌日に上陸が予定されていた米軍部隊の先遣隊長のハリス (Harris, Charles S.) 准将らがソウルに到着し、総督府および日本軍幹部と徹夜の予備交渉に入る頃、ソウルの京畿高等女学校講堂において、「全国人民代表大会」(全国人民代表會議)の開会が宣言されたのである。建國準備委員会の内部対立の経過から考えて、全国人民代表大会の招集は、九月二日以後、呂運亨と朴憲永の二人を中心とする数人の会合によって決定されたものと思われる。すでにみた九月八日の桂洞熱誠者大会で、朴憲永はそれを左翼陣営統一のための「特別協議会」と表現した。また、「全国人民代表大会」と称したにもかかわらず、そのために正式に全国的な代議員選定やその招集手続きがなされた形跡は存在しない。大会開催の通知についても、呂運亨自身が「予め知らせることができなかった」ことを陳謝し、それを「非常措置」と表現した。おそらく、ソウルに在住した建國準備委員会の関係者、再建派共産主義者、そして連絡可能な一部の地方代表によって、突然、人民代表大会の開催が強行されたのだろう。さらに、京畿高女講堂の収容能力から考えて、そこに集合した代議員が五、六百人を超えることはなかつただろう<sup>(41)</sup>。

六日の人民代表大会では、李如星が開会を宣言した後、呂運亨が議長に選出されて開会辞を述べた。李萬珪に

よれば、その要旨は「非常の時には、非常の人物だけが、非常の方法で、非常の仕事をするができるのである。戦後問題の国際的解決に伴い、わが朝鮮にも解放の日が来た。我々の新国家は労働者、農民、一切の人民大衆のためのものでなければならぬ。我々の新政権は全人民の政治的、経済的、社会的な基本要求を完全に実現することのできる真正な民主主義政権でなければならぬ。それゆえに、我々はただ日本帝国主義の残滓勢力を一掃するだけでなく、あらゆる封建的残滓勢力と反動的、反民主主義的勢力とも、果敢な闘争を展開しなければならぬ。今日、ここに集まった皆さんは、過去、日本帝国主義の野獸的暴圧の下で、百折不屈に闘ってきた闘士たちである。我々がお互いに手を取り合って立ち向かうとき、我々の前途に立ち塞がるいかなる困難も、よく克服することができるだろう」というものであった。このとき以来、呂運亨は「革命家がまず政府を組織し、人民の承認を受ける。急激な変化があるときに、非常措置として生まれたのが、すなわち人民共和国だ」との主張を繰り返した。<sup>(42)</sup>

呂運亨の開会辞の後、黙祷と国歌斉唱に続いて許憲による経過報告があり、さらに朝鮮人民共和国組織法案の審議に入った。法案の各条項が逐次朗読され、多少の修正の後に可決されると、ただちに正副委員長を含む五人の詮衡委員による中央人民委員の選定作業が開始された。発表された中央人民委員は五五名であり、これに候補委員二〇名と顧問一二名が加えられた。人民委員のなかには、李承晩、金奎植、金九、金元鳳、申翼熙、金日成、武亭などの海外独立運動指導者や金性洙、金炳魯、安在鴻、曹晩植（北朝鮮在住）などの著名な右派民族主義指導者が含まれていたが、北朝鮮在住の李舟河を含めて、残りの大部分は共産主義者と左派民族主義者であった。金南植によれば、中央人民委員と同候補委員に占める共産主義者の割合は七〇%以上に達した。したがって、ここで構成された全国人民委員会の性格は、著名な海外指導者と少数の右派民族主義者を形式的に推戴し、共産主義者たちを主力にして構成された「国内左派連合」と表現されるべきだろう。しかし、それに対する批判を意識

してか、呂運亨は「選出された国民委員（人民委員）は各層各界を網羅した。これは本当に完全だとはいえ、これから人民の総意による代表委員が現れるときまでの暫定的委員だということが出来る。選出した委員の大多数は承諾するものと考える」（括弧内引用者）と指摘した。<sup>(43)</sup>

ところで、なぜ国内左派は国内右派の反対を押し切って、十分な手続きを経ないまま、急遽、新しい国家の樹立を宣言したのだろうか。タイムイング的にみて、それは何よりも米軍部隊が南朝鮮に進駐する以前に、また海外の独立運動団体や指導者が帰国する以前に、新しい国家の樹立を宣言し、それを既成事実化するための努力にほかならない。言い換えれば、国内に基盤をもつ左翼的な民族統一戦線のうえに、著名な海外指導者たちを推戴する新政府を樹立し、それをまもなく進駐する米軍当局とやがて帰国する海外指導者たちに承認させようとしたのである。したがって、それはある種の機会主義であった。呂運亨もそれを「連合軍の進駐が今日明日にもあるので、連合軍と折衝する人民総意の集結体がなければならぬだろう。その集結体の準備工作として急いで全国代表会議を開催しなければならぬのだ」（傍点引用者）と率直に表現した。しかし、左右両派に対して宥和的であった呂運亨らしく、朝鮮人民共和国は依然として「人民総意の結集体」そのものではなく、それを完成するための「準備工作」にすぎなかった。さらに、戦術的には、徐仲錫が指摘するように、右派勢力が結束して重慶政府を擁立する姿勢を鮮明にしたために、左派勢力としても、それに対抗できる「代案」（朝鮮人民共和国）を必要としたのだろう。言い換えれば、中央と地方で人民委員会を組織し、その周囲で、それを支える大衆運動を組織し、展開すればよいと考えたのである。最悪の場合、それは重慶臨時政府と人民共和国政府の「両非」、すなわち「相互解消」を主張する根拠になりうるものであった。<sup>(44)</sup>

微妙であったのは、呂運亨と朴憲永の政治的な関係である。宋鎮禹の説得に失敗し、さらに安在鴻に離脱された呂運亨は、九月初旬以後、左右両派の調整者としての役割を失って、朴憲永と共産党の組織力に依存せざるを

えなくなっていた。したがって、全国人民委員や閣僚名簿にその名前がなかったにもかかわらず、朝鮮人民共和国の樹立は朴憲永の主導によって進行したと解釈されるべきだろう。李萬珪によれば、建国同盟は新しい国家の国号として「朝鮮共和国」を提案したが、議場で多数を得ることができずに、「朝鮮人民共和国」が採択された。共產主義者が多数を占める議場では、ソ連軍占領地域で進行していた「人民委員会」方式が支持されたのである。自らが主導した建国準備委員会が人民委員会に改編されることに、呂運亨は複雑な感慨を抱いたに違いない。事実、弟の呂運弘は「人民共和国樹立において、兄は能動的ではなく受動的であった」「このような過激で急進的な政治行態は兄の生理に合わなかった」と指摘し、人民共和国の樹立が「新しい民族国家の建設のための一つの方途になりうる」ことを期待しつつ、ソ連軍が三八度以北で実施していることから判断して、「三八度以南においても、必ず同一の処置がある」と想定するというのが、その当時の呂運亨の政治的な立場であったと証言した。しかし、共産党の主導にもかかわらず、朝鮮人民共和国の樹立は、各地方人民委員会の結成を先行させ、それを土台にして全国的な人民政権を組織するという北朝鮮方式とは明らかに異なっていた。<sup>(45)</sup>

全国人民代表大会の二日後の九月八日、中央人民委員会第一回会議が三七名の人民委員を集めて開催された。そこでの議論によって、新政府の部署、すなわち各部長（閣僚）の人選が呂運亨と許憲の二人に委嘱され、さらに日本の各機関を接収する臨時委員の選出も、それを九月九日までに発表するとの条件の下で、呂運亨、許憲そして崔容達の三人に一任された。また、朝鮮人民共和国の宣言および政綱の起草は李康国、朴文圭そして鄭泰植の三人に委任された。ただし、呂運亨自身はその前日に再び五人の暴漢に襲われて負傷し、その後約三週間にはわたって地方での療養を余儀なくされた。そのために、中央人民委員会が連日開催され、そこで新政府の構成が決定されたのである。九月一四日に発表された政府部署では、主席に在米の李承晩が推戴され、副主席に呂運亨、國務総理に許憲が就任した。また、主要閣僚である内務部長、外交部長、軍事部長そして通信部長に、それぞれ

重慶臨時政府の要人である金九、金奎植、金元鳳そして申翼熙が指名された。ただし、重慶政府が帰国してその職責が埋められるまで、それぞれ許憲、呂運亨、金世鎔、李康国が臨時的に代理することとされた。さらに、右翼陣営からも、司法部長に金炳魯、そして文教部長に金性洙が指名された。ただし、それが受諾されないことを見越して、ここでもそれぞれ許憲と李萬珪が臨時代理とされた。その他に、北朝鮮在住の曹晩植が財政部長に指名され、注目される。それ以外の保安部長、宣伝部長、経済部長、農林部長、保健部長、交通部長、労働部長には、朝鮮人民共和国の樹立を推進した建国準備委員会系ないし共産党系の人物が就任し、書記長に李康国、法制局長に崔益翰、そして企画局長に鄭栢が就任した。<sup>(46)</sup>

しかし、呂運亨の側近で全国人民委員に選出され、一四日の人民委員会議で議長を務めた李萬珪は、自らの努力にもかかわらず、この政府部署が呂運亨の承諾なしに発表されたと主張し、そのことに不満を表明した。言い換えれば、(1) 政府を組織するのに軍政当局の諒解が得られていないこと、(2) 政府庁舎を準備できないこと、そして(3) 政府主席(大統領)の体面を維持できるだけの準備がないことを考慮して、呂運亨はその発表を留保しようとしたというのである。ソ連軍のソウル進駐を前提にした建国準備委員会の結成と比べても、朝鮮人民共和国の樹立がさらに独善的かつ強引であったことは否定できない。長安派共産党の手法に対する厳しい批判にもかかわらず、朴憲永もまた情勢の急激な変化に翻弄されて、多分に機会主義的な方法で新国家の樹立を宣言し、人民政権を組織したのである。北朝鮮占領に関するスターリンとアントノフ (Antonov, Aleksei I.) の基本指令が発せられたのが九月二〇日であったことを考えれば、南朝鮮での人民共和国の樹立がモスクワからの指示や平壤に進駐したソ連軍司令部との十分な協議に基づく決定であったとは考え難い。しかし、二日後に、占領を目的として南朝鮮に進駐した米軍当局にとって、それは自らの権威に対する「正面からの挑戦」以外の何ものでもなかった。<sup>(47)</sup>

### 3 米軍当局の初期情勢評価——誤解、誇張そして独断

ホッジ司令官と南朝鮮の政治指導者との最初の会見は、前日の記者会見で予告されたとおり、進駐四日後の九月一二日午後二時三〇分に京城府民館で実現した。三三あるいはそれ以上の党派から、それぞれ二名の代表を招致したはずの会合は、一、二〇〇名が出席する大集会に膨張していた。ホッジは午後二時四〇分に姿を現し、自分を農場で生まれて育った「普通の人」であると紹介した。太平洋戦域での戦闘について語ると、会場は大きな拍手喝采に包まれた。続けて、日本支配を終わらせ、朝鮮を解放するために来たことを告げ、自分は朝鮮人民とできるだけ友好的な関係を保って、その活動に対する規制を少なくしたいと望んでいると強調した。また、できるだけ早期に政治指導者たちと個別に会見すると約束した。しかし、自分は兵士であって外交官ではない、連合国の朝鮮計画について十分な知識をもっていない、自分の任務は日本軍の降伏を受理し、再調整 (readjustment) が成就されるまで法と秩序を維持することであると語った。さらに、朝鮮を「やがて」(in due course) 独立させるとしたカイロ宣言に言及し、安定した政府が形成されれば朝鮮はすぐに独立できるが、「それは一朝一夕に達成されるものではない」「性急な行動は混沌、すなわち完全な破綻をもたらすだけだ」と告げると、拍手が鳴り止んだ。ホッジはさらに続けて、阿部信行・朝鮮総督を解任したばかりであり、朝鮮の指導者と民衆の助力が必要であると訴え、朝鮮人自身が街頭行進と示威行動 (Parades and demonstrations) を最小限に減らし、職場に復帰しなければならぬと主張した。その日、ソウル市内では朝鮮人民共和国を支持する複数の街頭行進が組織され、ホッジ司令官が演説中の午後三時頃に、そのうちのひとつが府民館の前を通過したのである。<sup>(48)</sup>

街頭行進は人民委員会によって組織されたものであり、大部分が若い労働者と学生から構成されていた。男女の比率はほぼ半々であった。星条旗、太極旗、ソ連国旗、そして無数の旗幟が掲げられ、左派の宣伝チラシが散布された。多くの赤旗が掲げられたために、米軍当局内には、それが共産主義への共感を示すのではないかとの

疑念が生じたが、街頭行進は秩序整然としており、憲兵と警察によって完全に監督されていた。一月月に開催された全国人民委員会代表者大会では、そのときの模様が「有史以来はじめてみる壯観」であり、「とくに労働者とその政治的スローガンを高く掲げて威風堂々とその要求を大衆の前に示威したことは、わが国において実に画期的な意義をもつものであった」と報告された。他方、その日夜の軍団スタッフの会合で、この街頭行進について、ホッジ司令官はそれが「ソ連軍の到来を予期して、日本人によって設立された団体」（建国準備委員会のこと）によるものであるかどうかを質問した。警務局長に就任したばかりのシック (Shick Lawrence) 憲兵隊長も大衆集会や街頭行進に懸念を表明して、現状では、基本的な秩序を維持するだけの警察力が不足すると指摘した。しかし、ホッジは必要以上の規制を望まず、街頭行進を許可制にして、憲兵を随行させればよいと指摘した。そうすれば、行進や集会はやがて消滅するだろうと考えたのである。しかし、シックは仁川で発生した発砲事件と犠牲者の葬儀の模様に関して説明し、日本人を政府から追放しろと要求する旗幟に注意を喚起した。<sup>49)</sup>

ホッジ司令官にとって不幸なことに、米軍が戦争終結の約三週間後にソウル進駐したとき、南朝鮮内の政治勢力はすでに左右に分裂し、相互に妥協できない対立状態に陥っていた。事実、ホッジと各政党代表との会見に、左派勢力から有力な指導者が出席した形跡はない。しかも、左派勢力の活動、すなわち建国準備委員会の活動と朝鮮人民共和国の樹立は朝鮮民衆の即時独立の願望を反映していたし、そこに結集した勢力は明らかに組織された多数派であった。後にみるように、米軍部隊の地方進駐が進展し、李承晩、金九、金奎植などの著名な独立運動指導者と重慶臨時政府が帰還するまで、右派勢力は左派勢力に対抗するだけの政治的基盤を獲得することができなかったのである。ただし、進駐直後の時期に、ホッジ司令官とその政治顧問であるベニングホフ (Benninghoff, H. Merrell) がそのような情勢を正確に理解したかどうかは疑わしい。九月一二日の G-2 定期報告 (G-2 Periodic Report) は、南朝鮮情勢、とりわけ左派勢力についての正確な情報入手できないまま、米占領軍

当局が政治の第一線で権力行使の役割を負わされたことを示している。事実、朝鮮人民共和国について、同報告書は「親日家として知られる呂運亨の指導の下で」、朝鮮総督府からの財政的な支援を得て、さらにソ連軍がソウルを占領するとの情報に基づいて、「八月初旬に對日協力者のグループによって組織された」と記述していた。それについての情報は極めて不正確であり、朝鮮共産党については、その存在に疑問の余地はないが、その指導者たちは未詳であるとして、その組織力に懸念を表明した。ベニングホフに強い印象を与えたのは、むしろ無数の政治的党派が「雨後の筍」のように出現し、その大多数が即時独立、日本人の一掃、日本資産の接収など、同じ目標を掲げていたことである。進駐一週間後、すなわち九月一五日の国務省への第一号報告において、彼は朝鮮人がカイロ宣言にある「やがて」という語句を「数日内に」とか「ただちに」と理解していると紹介し、即時独立が実現しないことが朝鮮民衆に大きな失望を与えていると指摘し、南朝鮮情勢を「火花を散らせばすぐに爆発する火薬庫」に例えたのである。<sup>(50)</sup>

南朝鮮情勢についての全般的な評価は、ようやく進駐三週間後、九月二九日の長文の第六号報告にみられる。ベニングホフは、そこで、まず南朝鮮の政治勢力が保守派と過激派の二つのグループに明確に分かれ、それぞれがさらに固有の政治哲学を有するより小さな党派に分裂しているという全般的な認識を示し、続いて個別的な分析を展開した。過激派に関しては、その主力が朝鮮人民共和国の樹立を主張する建国準備委員会であること、かれらは韓国民衆党よりもよく組織されているように思われること、過激派は米軍到着直後の一連の街頭行進と示威行為に責任があり、その刊行物は明確な計画性とおそらく訓練された方向性をもっていること、その中心的な指導者は呂運亨であるが、彼は重慶の臨時政府と無縁であること、その信念が共産主義に変化したので、民衆は彼をどのように判断すべきかわからずにいることなどの諸点を指摘している。しかし、不思議なことに、そこには依然として朝鮮共産党と朴憲永が演じた役割に対する明確な評価が存在しない。<sup>(51)</sup>

また、この報告にみられる現状認識と将来展望は、朝鮮内の左右対立と進駐者の対ソ不信がどのように結合したかを示すよい例である。まず前者について、ベニングホフの理解の大枠は以下のようなものであった。(1) 日本人はソ連軍の進駐を前提に呂運亨に暫定政府の樹立を依頼した。しかし、日本との結びつきに疑惑を抱いた宋鎮禹がそれへの協力を拒絶したために、代わりに共產主義者たちがそれに加わった。(2) その結果、南朝鮮内の政治勢力は、よりよく組織され、かつ声高の過激派と反共的で新民主主義的な信念のために組織され、重慶臨時政府を支持する保守派に明確に二分された。(3) 過激派は重慶政府に言及しないが、李承晩、金九、金奎植らの要人を人民共和国の閣僚に含め、その看板の下で活動している、(4) 過激派へのソ連の浸透の性質と程度は確かではないが、相当のものであるかもしれない。呂運亨は共產主義的な傾向を持つ機会主義者だろう。また、その政治的な意味について、ベニングホフは次のように展望した。(1) ある特定の党派を支持しない限り、米軍政府はこのような情勢から距離を置く以外の政策をもたないが、李承晩と重慶臨時政府要人が帰国すれば、過激派に反対して保守派に味方する口実になるだろう。(2) ソ連は厳格な一党制の基礎の上に地方政府を樹立しており、おそらく東欧諸国と同じように北朝鮮をソビエト化するだろう、(3) 米国はまもなくルーマニア、ハンガリー、ブルガリアで直面しているのと同じような問題に直面するだろうが、そのときには、米軍占領下の南朝鮮はすでに相当の共產主義者を抱えているだろう。<sup>(32)</sup>

このようなベニングホフの情勢評価には、左派勢力に対する多くの誤解、誇張そして独断が存在する。また、右派勢力や重慶臨時政府に対する共感のほかに、政治介入に慎重な國務省の政策に対する不満も感じられる。さらに、東欧諸国をめぐる米ソ対立が南朝鮮情勢の分析に影響を及ぼしたことも重要である。ただし、それだけではない。南朝鮮の左右両勢力の米軍当局に対する態度が極端に相違し、一方が相当に独善的であり、他方が協力的であったことが、米占領軍当局の評価に大きな影響を及ぼしたことも指摘されなければならないだろう。たと

えば、九月一二日のホッジ司令官と各党派代表との会見で、趙炳玉と任信永は韓国民主党のイメージを巧みに演出することに成功した。ホッジの演説が終わると、朝鮮服を身につけた一人の端正な老人が前に進み出て朝鮮語で短い挨拶をした後、司令官に太極旗を手交した。万雷の拍手が鳴り止むと、今度は趙炳玉が許可を得て登壇し、流暢な英語で、共通の敵を打倒して朝鮮人の三六年間の夢を実現してくれた連合国、とくに米国への心からの感謝の意を表明し、自分は朝鮮の混乱した状況を恥じていること、米国の助けを借りてきつと強力な政府を樹立することができること、重慶にある臨時政府は必ずホッジ將軍に協力すると思われることなどを強調したのである。趙の短い演説が終わると、韓国の女性を代表して、任信永が再び巧みな英語で感謝の意を表明した。これらのことがホッジ司令官と米軍首脳に街頭を行進するデモ隊の青年たちとは異なる強い印象を与えたことは間違いない。一二日のG-2定期報告は韓国民主党の指導者たち、とくに米国に留学した経験をもつ趙炳玉、尹潁善、尹宅栄に注目した。ベニングホフも、前述の第一号報告のなかで、「このような政治状況のなかで最も鼓舞的な一つの要素は、年配のよりよい教育を受けた朝鮮人のなかに数百人の保守派がソウルに存在することである……これらの人々は、臨時政府<sup>53</sup>の帰還を願っており、多数派を構成しているわけではないが、おそらく最大の単一グループだろう」と指摘した。

#### 4 米軍政府 vs. 朝鮮人民共和国——主権論争

他方、占領軍当局から好意を得るためではあったが、左派勢力の態度は当初から相当に硬直し、独善的であった。たとえば、米軍が上陸した九月八日、シックが説明したように、仁川市内で朝鮮人保安隊（建国準備委員会系）が日本の特別警察隊と衝突する事件が発生した。当日、仁川には米軍の指示によって歓迎禁止と外出禁止が公示されていたが、保安隊の青年たちは米軍歓迎の示威行動を展開して、警察隊の警備区域を突破しようとした

のである。それを阻止するために、午後二時に警察隊が発砲して保安隊員二名が死亡し、二階から見物していた日本人一名が威嚇射撃の犠牲になった。青年たちの行動は米軍の仁川上陸を歓迎し、解放後も京城・仁川地区を警備する特別警察隊に抗議するためのものであったが、少数の兵力で進駐する第七師団は秩序維持とソウルでの降伏受理を優先し、仁川での歓迎行事を禁じていた。米軍の仁川上陸は明らかに敵軍を武力で掃蕩した後の凱旋入城とは異なっていたのである。それが事件の真の原因であった。しかし、保安隊側は九月一〇日に朝鮮人犠牲者二人のために盛大な市民葬を執り行った。二人の棺を中央にした数千人の大行列が米国旗、ソ連旗、太極旗、赤旗、プラカードなどを掲げて市内を行進し、天主教(カトリック)会堂に向かったのである。また、前出の九月一二日のソウル市内での示威行進のなかには、二人の犠牲者に敬意を表するための行進が含まれていた。しかし、それにもかかわらず、九月一三日、米軍裁判官は保安隊側の布告違反を認定して、警察隊の責任を問わなかった。保安隊側の再審請求に対しても、むしろ警察官以外の者が警察官に類似する行動をとったことを問題視したのである。仁川保安隊は九月二六日に解散させられた。<sup>54)</sup>

他方、同じ九月八日の早朝、呂運亨の指示によって、建國準備委員会代表たちが仁川に上陸する米軍司令官に歓迎メッセージを伝達することに成功した。呂運弘の詳細な証言によれば、そのために、白象圭、趙漢用と彼自身の名が数日前から小船に乗って海上で待機した。他の誰よりも先に米軍司令官と接触し、歓迎の意思を表明して、朝鮮建國準備委員会(Provisional Korean Commission)の存在を知らせ、必要な情報を交換しようとしたのである。代表格の白象圭は一九〇五年にブラウン大学を卒業した裕福な地主であった。三人は八日早朝に米上陸船団のなかからホッジ司令官の乗船する「カトクチン」(CATOCTIN)を探し当て、鎖梯子で乗船することに成功した。建國準備委員会について、彼らは朝鮮人民のために民主的な形態の政府を組織することを目的とし、全国に一三五の支部をもっていると説明した。三人の代表は重慶臨時政府に対して好意的でなかったが、米軍側

から「明らかに好人物」であるとの評価を得ることができた。事実、三人は食堂で朝食を振る舞われ、正午過ぎまで滞在したのである。しかし、特定の党派に好意を示したと受け止められることを懸念して、ホッジ司令官に代わって軍団参謀たちが応接した。歓迎メッセージを手交した後、三人は参謀たちから進駐後のソ連軍の行動、発電所の分布状況と現状、そして建国準備委員会の性格、権限、組織形態、構成人物、思想傾向などに関して細かく質問された。三人はとりわけ建国準備委員会について丁寧な回答したが、参謀たちは必ずしも納得する表情ではなかったとされる。その理由について、呂運弘は後に自分たちが朝鮮人民共和国の成立を知らず、米軍側はすでに知っていたからであると推測した。また、三人は信頼できる朝鮮人と対日協力者についての二種類の名簿を手交した。他方、三人も最も重要な情報、すなわち「いくつかの亡命政府」に対する米国の見解について質問し、さらに米軍政府を全面的に承認すると保証し、「米軍政府と朝鮮民衆の間の連絡役」として働くことを申し出た。<sup>(55)</sup>

呂運弘が懸念したように、確かに両者の間の意思疎通は十分ではなかった。前出の九月二二日のG-2定期報告は、仁川港での出来事について記述しながら、白象圭を建国準備委員会の委員長とみなしていた。建国準備委員会と人民共和国の関係について理解できずに、両者をまったく別の組織として認識したのである。仁川海上で進駐する米軍部隊と接触した三人の代表が新しい国家の樹立を通告したにせよ、それを知らずに建国準備委員会について説明したにせよ、呂運亨の奇襲的な試みは明らかに失敗に終わったのである。しかし、すでにみたように、左派勢力はその後も人民共和国の存在を既成事実とする態度を変えずに、九月一四日に新政府を組織して、その閣僚名簿を発表した。さらに、一〇月三日、人民共和国中央人民委員会は翌年三月一日の独立宣言記念日を期して、第一回全国人民代表大会を招集する方針を決定して、その代表者の選考を呂運亨、許憲、崔容達など、一二名に委託することを発表した。<sup>(56)</sup>

ところで、このような左派勢力の硬直した態度はどのように正当化されたのだろうか。その意味で興味深いのが、一〇月一日にソウル市内の各新聞社の記者を集めた呂運亨の会見である。呂運亨は、そこで、朝鮮の独立は連合国が我々にくれる単純な贈り物ではなく、三六年間、流血の闘争を継続してきた結果、革命によって獲得されたものであり、それ故に、まず革命家が政府を組織し、人民の承認を受けることができるとの認識を示し、さらに「人民が承認しさえすれば、朝鮮人民共和国はそのままでありうる」と強弁した。要するに、ここでいう「人民の承認」とは、朝鮮人民が選挙によって自らの政府の形態を選択することではなく、特定党派から構成された「人民代表大会」による「承認」にほかならなかったのである。呂はまた、重慶政府のほかにも米国に二つの党派が存在し、延安と西シベリアにも政党があるので、五つの政府が存在することになると指摘し、重慶政府だけを支持するわけにはいかないと主張した。さらに、自分が三年間にわたって延安の華北朝鮮独立同盟と連絡し、地下運動をしてきた事実を明らかにし、独立同盟が五万人ないし六万人の会員を有するとも主張した。このような呂運亨の主張が著しく誇張されたものであったことはいままでもない。しかし、朝鮮人民共和国中央人民委員会の主張はそれ以上に独善的であった。たとえば、一〇月五日に発行された「米国市民へのメッセージ」と題する英文パンフレットのなかで、彼らは米軍政府があらゆる行政機関と経済施設を朝鮮人民共和国に引き渡すべきであるとする主張を展開し、もし米軍政府が朝鮮人の意思と要求に反対するならば、「米国の世論は決してそれを許さないだろう」と宣言した。人民共和国は米軍政府に「主権論争」を挑んだのである。<sup>(57)</sup>

これに対する反撃として、一〇月九日、アーノルド (Arnold, Archibald V.) 軍政長官は人民共和国の国家としての権威や権力を公式かつ徹底的に否定し、マッカーサー將軍の布告、ホッジ中將の一般命令そして軍政長官の軍政法令に従って創設された米軍政府こそ、三八度線以南の朝鮮における唯一の政府であると主張する激烈な対新聞声明(一〇月一〇日付)を公表した。また、すべての新聞にそれを翌日の一面の注意を引く位置に掲載する

ように要求した。アーノルドは「これは命令の効力をもつ要請である」と通告したのである。朝鮮人民共和国について、アーノルドは「自薦の官吏、警察隊、全人民を代表する。大小の会議、自称の朝鮮人民共和国は、いかなる権威も、権力も、実体もない」と主張し、さらに「もしそのような高位高官を偽称する者たちが娯楽的な価値さえ疑わしい人形劇を演じているだけならば、ただちにその劇に幕を降ろさなければならぬ」と警告した。また、翌年三月一日を期して実施するとされた「虚偽選挙」（第二次全国人民代表大会のこと）についての新聞報道を問題視して、それを「軍事政府に対する最も重大な妨害」「軍事政府に対する公然たる反対行為」として非難したのである。人民共和国に対する敵意をむき出しにしたアーノルドの声明が、その率直で攻撃的な表現のために、大きな社会的反響を引き起こしたことはいうまでもない。朝鮮人民共和国中央人民委員会は、翌日、「朝鮮人民共和国の誕生は米軍上陸以前の既定事実であり、第二次全国人民代表大会が一九四六年三月一日を期して招集されるのは、第一次全国人民代表大会の決議によるものである」とする談話を発表して、それに反撃したのである。また、『毎日新報』は、一日になって、アーノルド声明と人民委員会の談話を同じ紙面に掲載して、米軍政府の怒りを買った。中央人民委員会は、さらに一四日にも、「朝鮮人民共和国に対するアーノルド長官の愚弄的かつ侮辱的な声明は反人民政策の集中的な表現である」と非難する声明を発表した。<sup>58)</sup>

中央人民委員会での討議の詳細は明らかではないが、一月四日に発表された李康国書記長の有名な論文「軍政と人民共和国」にみられるように、その要点は、米軍政府側の対応によっては、その権威の下でも人民共和国が主権を維持することは可能であると主張することにあつた。朝鮮共産党の理論家として知られた李康国は、「人民共和国は人民の総意によつて誕生しており、それが民衆の絶大な支持を受け、民衆のなかで成長し、強化されていく限り、客観的に厳然たる存在であり、国家としての資格を有しているとみななければならない。したがって、それは軍政の下においても十分に自己の存在を主張する権利を有するので、朝鮮の自主独立と国家建設

を援助する軍政の下で、その存在を否認されるいかなる国家法上の理由もない」と主張したのである。また、その翌月の「米国への覚書」と題する別の論文でも、李は両者が矛盾対立することを否定して、人民共和国は「軍政の意思を尊重し、軍政が存在する間、政府としての機能と行動を保留し、朝鮮人民のために軍政の政策に協力して、軍政をしてその本然の使命完遂において有終の美を得させようとする」とも説明した。米軍政府との衝突を回避しつつ、人民共和国の正当性を維持しようとしたのだろう。しかし、李康国がポーランド亡命政府を例に挙げて、「強大国であるイギリスが育成し、承認までしたにもかかわらず、国内に戻って勢力を行使できず、ついには国内民衆に支持される解放委員会を母体にした政府（ルブリン政府）が列国の承認を得た」（括弧内引用者）と指摘し、それを「国際的承認に関する良き範例である」と主張したのは明らかに行き過ぎであった。そのような主張は朝鮮人民共和国政府をルブリン政府、重慶臨時政府をポーランド亡命政府と同一視するに等しく、それこそワシントンや米軍司令部がもつとも警戒する事態にはかならなかったからである。<sup>59</sup>

### 三 米軍政府と韓国民主党の急接近

#### 1 軍政長官顧問会議——保守派人材の登用

南朝鮮内での激しい抗議に直面して、また間接統治を直接統治に転換する方針の下で、米軍当局は九月一四日までに朝鮮総督府の日本人幹部および警察官をすべて解任し、その後任幹部に米軍将校を任命した。また、二〇日には、アーノルド軍政長官の下で発足した米軍政府の機構を公表した。さらに、その間に、新たに任命された米国人の局長および道知事の下に補佐官として朝鮮人代理を任命し、やがてその職務を引き継がせるという重要な方針（両局長制）を決定した。しかし、現地事情を知らないまま、はじめて行政を担当する米軍将校の補佐役

として、いかなる朝鮮人を任命するかは、軍政の内容に直接的に影響を及ぼす重要な問題であった。事実、朝鮮総督府の人材登用が日本人に偏重していたために、中央や地方で行政任務を担当するだけの能力や経験を有する朝鮮人の官僚候補者は極めて限られていたし、その多くは日本の植民地統治機構に関係したことのある者たちであった。さらに、朝鮮人民共和国を樹立した左派勢力は、当然のように、その対象から排除された。したがって、情報当局や政治顧問が注目したように、英語を駆使できる米國留学の経験者や日本留学を含めて、より高い教育を受けた「数百人の保守派」が、その有力な候補者にならざるをえなかったのである。いうまでもなく、そのような条件を満たす人材の多くは、中央や地方で韓国民民主党の下に結集したり、それを支持したりする人々であった。<sup>(60)</sup>

しかし、当初、ホッジ司令官は各党派の代表たちと個別的に面談し、その過程で、彼らに適切な人材を推薦させる方式を考えたようである。米軍政府情報局長は、九月一七日、ホッジ司令官に面談を要請する各党派代表に、政党内、組織、政見ないし政綱を書面で提出するだけでなく、学務局長代理、法務局長代理、財務局長代理、交通局長代理、鉱工局長代理、京畿道知事代理、京城府尹代理そして高陽郡守代理として適当な人材を推薦するよう要請したのである。しかし、そのような試みは成功せず、一〇月初めまでに、米軍政府は各界の指導的人物を軍政長官顧問に任命して、これらの人事を含む全般的な問題を諮問するという方式に転換した。沈之淵によれば、これは九月二二日に韓国民党中央執行委員会が採択した「行政と人事の公正を期すために、軍政当局は朝鮮人中で名望と識見を具備した人物によって中央委員会を組織し、行政と人事に諮問できるようにすることを希望する」との決議を受容するものであった。すでにみたように、九月一六日の結党大会でも、韓国民民主党は米軍政当局に「公正・有為の朝鮮人の官吏採用」を要請することを決議していたのである。アーノルド軍政長官は一〇月五日付で金性洙、金用淳、金東元、李容高、吳泳秀、宋鎮禹、金用茂、姜炳順、尹基益、呂運亨、曹晩植の

一人を軍政長官顧問に任命した。これらの顧問のうち、呂運亨と曹晩植を除く九人は韓国民主党の党員ないしその支持者であった。そのうちの李容高は医者、呉泳秀は銀行家、金用茂と姜炳順は弁護士、尹基益は鉱業家として知られていた。曹晩植は平壤在任の著名な右派民族主義者であり、長老派教会の牧師であり、当時、ソ連軍政下で平安南道人民政治委員会委員長に就任していた。<sup>(61)</sup>

それでは、朝鮮人民共和国副主席であった呂運亨は、なぜ軍政長官顧問に任命されたのだろうか。興味深いことに、呂運亨は米軍到着時に三人の使節を仁川港海上に派遣して、ホッジ司令官に歓迎メッセージ（親書）を託したと主張し、それに回答がないのに自分から面会を求めるのは「事大的な態度」であると指摘していた。また、ホッジが呂運亨は日本人と結託したとの「悪質な中傷」を流布させたので、ホッジ司令官に面会を要請しないとも主張していた。しかし、正式任命の前日である一〇月四日、米軍政府からの招請に応じて、呂運亨は午前九時からアーノルド軍政長官、午後二時からホッジ司令官と会談した。その日、呂運亨は建國準備委員会委員長として会談したとされる。ホッジは呂に経済問題、とりわけ食糧・燃料問題と工場の操業再開についての協力を要請し、さらに、軍政長官顧問に就任するように説得した。しかし、それを受諾した呂運亨が別室に案内されると、そこには曹晩植を除く九人の顧問予定者がすでに集合していた。呂運亨が突然登場したので、彼らもまた驚いたとされる。その会合では、工場の操業再開、道知事任命などが審議された。また、互選によって、顧問会議の委員長には金性洙が就任した。当惑した呂運亨は議題と顧問の構成が適当でないと主張し、「いつでも私の主張とは九対一で対立するだろう」と述べて、その場から離れたとされる。<sup>(62)</sup>

翌日、すなわち一〇月五日午前に、呂運亨は宋鎮禹、安在鴻、白寛洙、許憲、趙東祐、金炳魯、張徳秀、崔容達、李鉉相、崔謹愚、金炯善、梁槿煥など、左右両派の多くの指導的人物を集める懇談会に出席した。朴憲永と李英が欠席するなかで、これらの参加者たちは二つの議題、すなわち（1）各政治団体の大同団結、（2）超党

派的な自主独立促進機関（統一戦線）の設立をめぐって、約六時間にわたって熱心に討議したのである。第二議題をめぐって議論が紛糾したが、左右の指導者が一堂に会したことが大きな社会的反響を呼んだ。それに加えて、一〇月四日以来の呂運亨の行動が朝鮮共産党を含む左派陣営に複雑な波紋を投げかけたようである。一〇月七日には、朝鮮人民共和国を代表して、李康国、李承燁そして朴文圭が緊急記者会見を開催し、行政顧問を含む米軍政府の人事や統一戦線の結成について、人民共和国の立場を表明したのである。彼らは「いわゆる親日分子が大勢登場したが、これは必然的に臨時的な措置であるだろう」（傍点引用者）と指摘し、「人民共和国は……民族反逆者である親日分子だけを除いて誰でも歓迎する」と強調した。李康国らは、米軍政府による保守派人材の登用や各党派の無原則な統一を批判し、民族反逆者や親日派を排除した民族統一戦線の結成を要求したのである。<sup>(63)</sup>

他方、一〇月七日午後、建、国、準、備、委、員、会、中、央、執、行、委、員、会、が開催され、「朝鮮人民共和国がすでに誕生し、人民の支持を受けたので、建国準備委員会はすでに創生期の神聖な使命を果たした」との理由で、建国準備委員会の解散を決議したことも注目される。翌日正午には、淑明高等女学校で委員長以下全員が出席して、荘厳な解散式まで挙行されたのである。呂運亨が建国準備委員会委員長として軍政長官顧問会議に出席したことが、共産党主導の多数派を刺激したのである。中央執行委員会で、呂運亨は「建国準備委員会を存続させ、建国準備委員会を中心に外交をすることが有利である」と主張したが、そのような主張は受け入れられず、建国準備委員会の解散が多数決（一四対七）によって強行されたのである。これに反発して、一〇月一〇日、呂運亨は建国準備委員会の母体となった建国同盟を復活させた。事実、建国同盟はその日に開催された三二の政党・団体による緊急問題討論会に参加した。また、一二日に政党主導で開催された第二回各党代表協議会（一〇月五日の懇談会の継続）にも、建国同盟を代表して崔謹愚と咸鳳石が出席し、「政党を超越した建国準備委員会のような」統一戦線組織が必要であると力説した。米軍政府に対する態度や超党派的な左右合作をめぐって、呂運亨と共産党の間に微妙な

見解の差異が生まれていたのである。呂運亨は一〇月一四日に正式に軍政長官顧問を辞任した。<sup>(64)</sup>

しかし、保守派人材の登用や民族統一戦線に関する朴憲永の見解は極めて明確かつ辛辣であり、自信に満ちていた。一〇月一〇日の記者会見で、朴は「我々はまず何よりも強力な民族的統一政権を組織しなければならぬ」と語ったが、それに続けて「しかし、親日派、民族反逆者は政権の樹立に参席する資格がない。この点において、共産党の見解は民族的反逆者を手足のように使用する米軍政の態度とはまったく違う」（傍点引用者）と主張したのである。要するに、米軍政府が軍政長官顧問に任命した韓国民主系の人材は「民族反逆者」であり、そのような中心的指導者たちが排除されるまで、韓国民主党は民族統一戦線の対象になりえないと主張したのである。また、占領軍当局に対しても、「朝鮮駐屯連合軍は南北を問わず早い期限内にその任務を遂行し、朝鮮人に政権を譲渡して立ち去ることを願う」と主張した。さらに、もつとも重要な朝鮮共産党の土地政策について、朴憲永は率直に「日本人と民族反逆者の土地はもちろん、地主の土地も自己耕作地以外の土地を没収、国有化し、農民に分配するのが我々の原則だ。しかし、土地分配問題の根本的解決は今後の我々の闘争如何によるので、现阶段においては、一般地主の土地小作料は三・七制（収獲物の三割を地主に納める）を主張する」（傍点、括弧内引用者）と主張した。朝鮮解放から二ヵ月も経過しないうちに、韓国民主党と朝鮮共産党は妥協不可能なだけでなく、「敵対的」ともいえる関係に陥っていたのである。<sup>(65)</sup>

## 2 米軍部隊による秩序回復——緊密な提携

軍政長官顧問会議の発足後、米軍政府と韓国民主党の間で緊密な提携が進展し、韓国民主系人材が大挙して軍事政府の重要な役職を担うことになった。安鎮によれば、その間に介在して大きな影響力を行使したのは、ホッジ司令官の通訳を務めた李卯黙（シラキユース大学博士）などの韓国人通訳官であり、さらに宣教師の息子

として戦前の朝鮮で育ったウィリアムズ (Williams, George Z.) 大佐などの朝鮮語に堪能な米国人であった。李卯黙は韓民党的な熱烈な支持者であり、「呂運亨と安在鴻は親日派であり、人民共和国は徹底した赤色集団である」と公言するほどの反共主義者であった。また、ウィリアムズはホッジ司令官の顧問を務め、米軍司令部と韓民党幹部を仲介する役割を演じた。たとえば、ウィリアムズは一〇月一七日に韓民党首席総務である宋鎮禹を訪ねて、その日の夜に宋鎮禹に元世勲総務と趙炳玉総務を加えた三人の幹部と会談し、ホッジ司令官からの要請を伝えた。それは「共産主義理論に透徹し、反共思想に徹底した有能で実践力のある韓国人のなかの愛国人士」を警察行政の要である警務局長 (朝鮮人代理) に推薦してくれとの依頼であった。翌日、宋鎮禹は趙炳玉を推薦し、趙炳玉はウィリアムズに伴われて、ホッジ、アーノルド、シックと会談した。ホッジは趙に韓民党からの離党を要求したが、趙は総務職を辞任するだけであった。正式発令は一〇月二〇日付であった。さらに、この重要な措置と前後して、大法院裁判長・金用茂、検事総長・李仁、司法局長・金炳魯、京畿道警察局長 (その後、首都警察庁長)・張澤相、文教局長・兪億兼、労働局長・李勲求、農務局長・李勲求、保健厚生局長・李容高など、米軍政府の多くの要職が韓民党の有力者によって占められることになったのである。<sup>66)</sup>

ところで、米軍政府による韓民党系人材の登用は、とりわけ警察、検察、裁判所など、公安・司法分野で顕著であった。言い換えれば、米軍当局と韓民党の提携は軍政機構を形成しただけでなく、朝鮮人民共和国への「共同の反撃」を意味したのである。事実、警務局長に就任した趙炳玉は、ホッジ司令官やアーノルド軍政長官に朝鮮人民共和国や人民委員会の不法化を進言しただけでなく、そのために全国の警察署を熱心に巡回し、さらに反共的な右翼青年団を育成した。また、そのような相互補完的な協力関係は米軍部隊の地方進駐と並行して、地方行政機構にまで拡大していった。事実、一〇月から一月初めにかけて米軍部隊が進駐するまで、南朝鮮の多くの地域では、解放直後に建國準備委員会支部が結成され、その下で左派系の青年たちが治安隊を組織し

ていたのである。たとえば忠清南道の中心地である大田では、治安隊員が朝鮮人警察官と一緒に駐在所に配置されたが、青陽、天安、温陽、洪城、保寧などでは、治安隊が郡庁を接收したり、警察官に銃器の引渡しを要求したりした。太田のいくつかの日本企業では、朝鮮人労働委員会が組織されて、日本人から経営権を剝奪したり、一時金を要求したりした。一〇月九日にカープ (Karp, William A.) 中佐が赴任して忠清南道知事に就任し、一〇月中旬までに米軍部隊が道内各地への進駐を完了することによって、ようやく「法と秩序」が回復されたのである。人民委員会も保安隊も、進駐軍部隊と直接的に対決しなかったし、できなかったからである。朝鮮共産党の朴憲永は、一〇月三〇日の記者会見で、地方で発生している軍政当局と人民委員会との間の対立について、「米軍政当局とは協力しなければならない。協力することが原則である。あるいは、民衆の利害が米軍政当局の意見と対立する場合があるかもしれないが、抗議や説明はできても、力で対抗したり衝突したりしてはならない……米国は日本帝国主義を追い払って、朝鮮を解放しようとして来たことを忘れてはならない」との見解を示した。<sup>67)</sup>

米軍部隊の進駐がもつとも遅れた全羅南道でも、解放直後に政治犯・経済犯が釈放され、八月一七日に建国準備委員会全南支部が結成された。その委員長については諸説あるが、三・一独立運動の地方指導者であった崔興琮牧師を委員長とし、左右両派の人材を集め、その下で左翼的な青年たちが勢力を拡大したのだろう。警察隊に代わって、三〇〇人以上の白シャツを着た治安隊 (「白シャツ隊」) が光州の街頭をパトロールした。騎馬警察官を気取る青年もいた。警察官を含む大多数の道庁職員は表面的に職場を守るだけだったので、治安隊が光州府の「唯一の組織的な統治機関」になったのである。朝鮮人警部一人が殺害されたり、日本人巡査が暴行脅迫されて自殺したり、朝鮮人強盗を殺害した日本人が自殺したりするなどの流血事件も発生した。もつとも治安が悪かった木浦府では、府尹 (市長) が徴用労働者から慰謝料を脅迫されたり、精米工場や製油工場が拳銃を持った強盗

団に襲われたりした。順天では、人民委員会が警察署を接収した。しかし、一〇月七日以後、米軍戦術部隊の進駐が開始され、二三日には第六師団から派遣されたリントナー (Jinner, Julius H.) 中佐が光州に到着して道知事に就任し、二五日に主要な日本人官僚をすべて解任した。リントナーは人民委員会と何度も会合して、政府ではなく政党として活動することを約束させようとした。治安隊の指揮者であり、政治犯として一一年間も服役した金ソク (Kim Suk) を警察部長に任命する可能性まで検討したとされる。しかし、一〇月二八日に事態は急転した。道知事、副知事、道警察部長らの軍事政府要人たちが殺害しようとする陰謀が発覚したのである。金ソクが首謀者として逮捕された。その当時、軍政要員として光州で情勢を観察していたミード (Meade, E. Grant) は、それが全羅南道における米軍政府と人民共和国の關係の転換点であったと述懐した。<sup>(68)</sup>

朝鮮人民共和国は間違いなく米軍が進駐した南部朝鮮地域で最も有力な政治勢力であった。宣教師の息子として生まれ育って、朝鮮をよく知るアンダーウッド (Underwood, Horace H.) は、農村地域を精力的に旅行した後、「人民共和国こそ米国占領地域でもっとも強力で、もっとも活発な組織である。それと比べれば、民主党は『ほとんどの地域でやっと組織されたか、組織されていない』し、農民への土地の無償配分や労働者への工場の無償提供のような魅力的なものをもっていないように思われる」と指摘した。また、一月に南朝鮮の各地方を訪問した軍事政府世論室 (Office of Public Opinion) のラレット (La Lette) 少佐は、アンダーウッドの指摘を裏付けて、「人民共和国の勢力は成長しているし、あらゆるレベルで政府に組織されており、その他の党派は共存する機会さえ与えられていない。軍事政府の介入なしに、その他の党派が勢力を得ることはないだろう」と報告した。事実、全羅南道の例でみたように、南朝鮮各地への米軍進駐がもたらしたものは、「占領」という名前の地方政治への介入であり、ソウルで成立した米軍政府と韓民主政の緊密な提携の地方への拡大であった。日本人の元全羅南道知事である八木信雄は、米軍政府から依頼を受けて朝鮮人道知事代理の候補者を五人推薦したが、その

なかから選ばれたのは、夫婦で米国に留学した経験を持つ病院長の崔ヨンウク (Choi Yeung Wook) であった。米軍部隊が地方に進駐するにつれて、現地の行政機構が保守派や親米派を中心に、とりわけ韓国民主党に有利な形で形成されていったのだろう。一月には、ソウルに倣って光州にも、そのほとんどが保守派の地方有力者から構成される軍政知事顧問会議が設置された。韓国民主党が米軍政府の必要とする人材を中央のみならず地方でも供給したのだから、両者の間に形成された緊密な提携は、一時的ないし戦術的な枠組みを超えるある種の政治連合であったといっても過言ではない。<sup>(69)</sup>

### おわりに

朝鮮解放は連合国による対日戦争勝利の産物であった。したがって、大日本帝国が降服した日に、それを受理する者が存在しないことほど、解放後の朝鮮政治を混乱させたものはない。植民地統治の終焉をいかに迎えるかという敗者の問題も、そこをいかに占領して統治するかという勝者の問題も、新しい独立国家をいかに樹立するかという被解放者の問題も、それぞれ適切な段階を経ることなく、ほとんど同時に現実の課題になったからである。その結果、解放直後の南朝鮮には、さまざまな形態の機会主義が蔓延した。たとえば、八月一五日早朝に、朝鮮総督府が呂運亨に治安維持のための協力を要請したのは、ソ連軍のソウル入城を確信し、事前に政治犯を釈放することによって、それに伴う混乱を最小限に抑制しようとしたからにはかならない。遠藤政務総監の決定を促したのは、三・一独立運動のトラウマであった。しかし、呂運亨はその機会を利用して、左右の政治勢力を糾合する建国準備委員会を結成し、自らその求心点になろうとした。進駐するソ連軍からの円滑な政権委譲を期待したのである。また、総督府の誤れる情勢判断は長安派共産主義者や朴憲永と再建派共産主義者にも共有された。

しかし、八月二四日頃までに米軍のソウル進駐が確実になった後、左派勢力、とりわけ朴憲永を中心とする共産主義者たちは、それまでの慎重な建国準備運動を放棄して、人民政権の樹立に向かつて前進した。米軍進駐予定日の前日に、数百名の中核的な左派勢力によって朝鮮人民共和国の樹立を宣言し、その約一週間後に人民共和国政府の閣僚名簿を発表したのである。朝鮮人民共和国の樹立は、米軍部隊が南朝鮮に進駐する以前に、さらには海外の独立運動団体や指導者が帰国する以前に、左派勢力が主導する新しい国家と政府を樹立し、それを既成事実化するための試みであった。さらに、それは右派勢力が結束して支持を表明した大韓民国臨時政府（重慶政府）に対抗するための予防措置であっただろう。いずれにせよ、小さな機会主義がより大きな機会主義を招来し、ついには冒険主義が発生したのである。

他方、朝鮮総督府からの要請にもかかわらず、宋鎮禹、金性洙、金俊淵、趙炳玉などの右派勢力は、戦争末期の対日協力を拒絶して情勢の推移を静観した。その中心にいた金性洙らの企業家や地主たちは、戦前や戦争中に、多かれ少なかれ日本の産業政策に協力せざるをえなかったもので、自分たちの政治的立場が微妙であると考えたのだろう。彼らは共産主義者を含む建国準備委員会に参加せず、重慶にある大韓民国臨時政府を支持する姿勢を明確にした。その瞬間に、南朝鮮の政治勢力が左と右に分裂したのである。やがて米軍の南朝鮮進駐が明らかになり、左派勢力が朝鮮人民共和国の樹立を宣言すると、右派勢力は韓国民民主党を結成して、重慶政府絶対支持と米占領軍当局への協力を表明した。米国や日本に留学したり、高等教育を受けたりした有識者や企業家、地主、資産家などが、そこに結集したのである。ただし、左派勢力とは違って、とりわけ農村地域で、それは大衆的な基盤を欠いていた。その後の事態の展開は比較的単純である。米軍が南朝鮮に進駐したとき、南朝鮮内の左右両派はすでに修復不可能なほどに激しく対立していたし、革命的な信念に基づく左派勢力の主張や行動が米軍当局の共産主義に対する警戒心をさらに増大させたからである。とりわけ、左派勢力が国家や政府の樹立を既成事実と

し、それに固執したことが両者の関係を決定的に悪化させた。南朝鮮の政治状況はソ連軍が占領して、体制選択の自由を奪った東ヨーロッパ諸国とは明らかに異なっていたし、米国政府や米占領軍当局にとっては、むしろ朝鮮人民共和国の樹立こそ対日戦争勝利の成果を横取りし、朝鮮人民から民族自決の権利を奪う行為にほかならなかったのである。左派勢力との関係が険悪化するのと反比例するかのようには、日本人でも左派勢力でもないという理由で、米軍政府は右派勢力への依存を深めていった。それが米軍政府機構に韓国民主党系の人材を登用する契機になったのである。また、そのような米軍政府と韓国民主党との緊密な提携は、米軍部隊の地方進駐が進展するにつれて、南朝鮮各地に拡大していった。解放後の南朝鮮に、米軍政府と右派勢力の緊密な提携、そしてその両者と左派勢力との激しい対立という「歪んだ三角関係」の権力構図が誕生したのである。

(1) 咸錫憲『意味でみた韓国歴史』(ソウル、第一出版社、一九七七年)、三三〇—三三一頁。李昊宰『韓国外交政策の理想と現実』(長澤裕子訳、法政大学出版社、二〇〇八年)、九一頁。

(2) 朝鮮軍残務整理部『朝鮮における戦争準備』、『朝鮮軍概要史』(宮田節子編・解説、不二出版、一九八九年)、一三七—二〇二頁。森田芳夫『朝鮮終戦の記録—米ソ両軍の進駐と日本人の引揚—』(嚴南堂書店、一九六四年)、一五—一九頁。

(3) 森田『朝鮮終戦の記録』、六六—六七頁。森田芳夫『朝鮮における終戦—十年前の八・一五—』(二)、『親和』二二二号(日韓親和會、一九五五年七月)、一一頁。キムギヒョプ『解放日記』第一卷(ソウル、ノモブックス、二〇〇一年)、八三頁。

(4) 森田『朝鮮終戦の記録』、六九頁。遠藤柳作『政権授受の真相を語る』、『国際タイムス』一九五七年八月一六日。森田『朝鮮における終戦』(二)、一一—一二頁。森田の記述は西広と長崎とのインタビューによる。

(5) 森田『朝鮮終戦の記録』、六七—七〇頁および『朝鮮における終戦』(二)。遠藤柳作・呂運亨会談が開催された時刻について、森田は「午前六時半」と記している。呂運亨は翌日の演説で午前八時とした。また、一九四六年九月、

- ソ連軍のロマネンコ少将に「一九四五年八月一日午前七時に」としたうえで、「前政務総監である遠藤が朝鮮人民の代表たちを呼んで、『四―五日後には、ソウルに赤軍先発隊が到着するだろうし、日本が降伏したので、我々が武装解除されるだろう』と述べた」と回想した。さらに、呂は「八月一日午後、ソウルでは赤軍が来るとうわさが広まり、市民たちは赤軍を静かに迎えるために出かけました。しかし、彼らはこの出会いが実現しなかったのたいへんに失望したし、三八度線が画定されたという事実を知ってさらに不満に思いました。」と続けた。これらが彼の記憶の要点であり、その直後の行動の出発点だったのである（『ロマネンコ・呂運亨会談録』、『シュテイコフ日記』一九四六―四八）、田鉉秀訳・解題、ソウル、国史編纂委員会、二〇〇四年、一八〇頁）。
- (6) 呂運弘『夢陽呂運亨』（ソウル、青廈閣、一九六七年）、一三四―一三五頁。呂鸞九『わが父・呂運亨』（ソウル、キムヨンサ、二〇〇一年）、一三四―一三六頁。李欄『解放前後の呂運亨』、李庭植『呂運亨―時代と思想を超越した融和主義者―』（ソウル、ソウル大学校出版部、二〇〇八年）、七三―七頁。
- (7) 南時旭『韓国保守勢力研究』（韓国京畿道、ナナム出版、二〇〇五年）、一九九―二〇〇頁。李起夏『韓国政党史』、四三頁。呂運弘『夢陽呂運亨』、一三六―一三七頁。呂運弘はその後得た情報と混同しているのだろう。たとえば『毎日新報』は八月二四日に「朝鮮に関しては、自由独立の政府が樹立されるまでは、米国とソ連の占領下で、それぞれに軍政が施行されるものと見られる」（東京発同盟通信）と報じた。呂運弘はこれを「漢江を境界線とする分割占領」と解釈したのではないか。
- (8) 呂運弘『夢陽呂運亨』、一三六―一三八、一四二―一四三頁。李萬珪『呂運亨闘争史』（ソウル、民主文化社、一九四七年）、一八九―一九〇頁。呂鸞九『わが父・呂運亨』、一四一―一四三頁。写真、『資料・大韓民国史』第一巻、二二―二三頁。安在鴻『八・一五前後のわが政界』、『セハン民報』一九四九年九月、安在鴻選集刊行委員会編『民世安在鴻選集』第二巻（ソウル、知識産業社、一九八三年）、四七二―四七三頁。『8・15の記憶』（KBS光復六〇周年特別プロジェクト）（ソウル、ハンギルサ、二〇〇五年）、二〇―二二頁。八月一日前後の行動については、異なる記憶が錯綜している。雪泥洞の宋圭桓宅に集まったとする説もある。この点については、李庭植『呂運亨と建国準備委員会』（『歴史学報』第一三四・一三五合併号、ソウル、一九九二年九月、三七―三八頁）を参照されたい。
- (9) 『毎日新報』（一九四五年八月一日）。森田『朝鮮終戦の記録』、七六―七七頁。『8・15の記憶』、二二―二三頁。

- (10) 『毎日新報』(一九四五年八月一七日)。森田『朝鮮終戦の記録』、七七―七八頁。李庭植『呂運亨』、四九六頁。シャブシーナ(キムミョンホ訳)『1945年・南韓にて』(ソウル、ハヌル、一九九六年)、七〇―七八頁。同じような光景は、翌日昼間にも繰り返された。孝洞の徳成女子商業高校で呂運亨が熱弁をふるう間に、突然、「ソ連軍が間もなくソウル駅に到着する」との声が上がり、校庭の群集たちは駅に向かった。呂運亨も安在鴻も、それに合流したというのである(呂薦九『わが父・呂運亨』、一四八―一四九頁)。
- (11) 『毎日新報』(一九四五年八月一七日)。安在鴻『海内・海外の三千万同胞に告げる』、『安在鴻選集』第二巻、一〇―一二頁。森田『朝鮮終戦の記録』、七八―八一頁。
- (12) 森田『朝鮮終戦の記録』、八一頁。山名『終政の記録』、五一―九頁。「京城日本人世話會々報」第六号(九月八日)、『京城日本人世話會各連資料』(申請・解題、九州大学韓国研究センター、二〇〇九年)。同會報には、「親切な保安隊」(九月三日)や「朝鮮人の友情に感激」(九月七日)などの記事も掲載された。
- (13) 森田『朝鮮終戦の記録』、八一―八二、一〇三―一〇四頁。森田、長田編『朝鮮終戦の記録』資料篇第一巻、一三―一八頁。「8・15の記憶」、二三―二四頁。終戦時の警察官総数は約二万一千人であったが、その多くが軍隊に召集されたために、日本人警察官は約六千人にまで減少していた(山名『朝鮮総督府終政の記録』、一三三頁)。
- (14) 「新朝鮮建設の大道―民族統一戦線を念願する各政党首脳の懇談会―」、『朝鮮週報』(一九四五年一〇月一五日号)、『夢陽呂運亨全集1』(夢陽呂運亨先生全集発刊委員会、ソウル、ハヌル、一九九一年、二一九―二三二頁)所収。森田『朝鮮終戦の記録』、七一頁。森田『朝鮮における終戦(二)』、一四頁。森田によれば、西広局長が岡部長に宋鎮禹との交渉を命じ、宋と旧知の関係にある生田知事が説得に当たった。しかし、「宋は、呂運亨とともに動くのを好まなかったからか、或いは時期尚早とみたからか、快諾しなかった」。金俊淵『独立路線』第六版(ソウル、時事時報社出版局、一九五九年)、二一三、二六一―二六三頁。金俊淵によれば、日本の降伏について言及しないまま、生田知事は朝鮮内で暴動が起きることを懸念して、学生たちの動向に大きな関心を示した。会談は五、六時間及び、二人は簡単な昼食を共にした。また、そこには岡警察部長が入り込んだ。古下先生傳記編纂委員会編『古下宋鎮禹先生傳』(ソウル、東亜日報社出版局、一九六五年)、二九三―二九九頁。『仁村金性洙傳』(ソウル、仁村記念會、一九七六年)、四六一―四六三頁。二つの伝記の記述は概要で一致するものの、日時、場所、人物などが微妙に異なる。

- る。なお、神崎参謀とは、第一七方面軍参謀（後方主任）の神崎長（ひさし）大佐のことと思われる（外山操編『陸海軍将官人事総覧（陸軍篇）』、芙蓉書房、一九八一年、四七九頁）。井原参謀長の下で朝鮮人側との接触を担当したようである。建国準備委員会の崔謹愚総務部長は、八月二日に井原参謀長を訪ねて神崎大佐と会談した（森田『朝鮮終戦の記録』、一〇四—一〇五頁）。軍司令部の大田移動後、神崎は司令部業務大綱の統制という重要な職責に就いた（『朝軍特命綴』、日本軍連絡部、昭和二〇年九月、防衛省防衛研究所戦史研究センター）。
- (15) 『仁村金性洙傳』、四六三—四六四頁。『古下宋鎮禹先生傳』、二八七—二八九、二九八頁。金俊淵『独立路線』、二五九—二六〇頁。
- (16) 呂運亨の上海での活動、極東勤労者大会への参加、中国革命運動との交流などについては、李庭植『呂運亨』を参照した。その他に、三・一独立運動後の宥和的な情勢を背景に、原敬内閣の拓殖局長官・古賀廉造の招待によって、呂運亨は陸軍大臣、内務大臣、朝鮮総督府などの同意を得て、一九一九年一月に東京を訪問した。朝鮮人独立運動家として、多くの日本政府要人や日本人有力者と面談し、朝鮮独立論や東洋平和論を訴えて名声を博した。
- (17) 李萬珪『呂運亨闘争史』、二六頁。二人の経歴については、『仁村金性洙傳』と『古下宋鎮禹先生傳』を参照した。また、植民地時代の産業資本の形成と金一族の台頭については、See Carter J. Eckert, *Offspring of Empire: The Kochang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism 1876-1945*, Seattle: University of Washington Press, 1991, pp. 29-59.
- (18) 金俊淵『独立路線』、二一六、二六二—二六三頁。『朝鮮解放年報』、七九—八〇頁。鄭栢「八月十五日朝鮮共産党組織経過報告書」、一九四五年一月七日、翰林大学校アジア文化研究所編『朝鮮共産党文件資料集（1945-1946）』（江原道春川、翰林大学校出版部、一九九三年）、七頁。李仁「解放前後片録」、『新東亜』（一九六七年二月）。宋南憲『韓国現代政治史』第一卷（ソウル、成文閣、一九八〇年）、三二—三九頁。
- (19) 李萬珪『呂運亨闘争史』、二〇六頁。『古下宋鎮禹先生傳』、三〇八—三〇九頁。なお、八月一五日に阿部信行総督から電話を受けて、翌日、朝鮮人として最高位にあった金大羽慶尚北道知事が大邱から特別機で上京した。遠藤および西広と協議した後、金は一七日から呂運亨と宋鎮禹の合作を斡旋した。呂は応諾したが、宋は「個人としては、呂運亨氏と一緒にすることはお許し願いたい」と拒否したとされる。呂運亨に治安維持のための協力を要請した後も、

総督府の要人たちはさらに広範な協力を得るために努力したようである（森田『朝鮮終戦の記録』、七一頁）。

(20) 李萬珪『呂運亨闘争史』、一六九—一七一、一八九—一九〇頁。呂運弘『夢陽呂運亨』、一二三—一二五頁。安在鴻『夢陽呂運亨氏の追憶』、「八・一五前後のわが政界」、『安在鴻選集』第二卷、二〇四—二〇五頁、四七二頁。たとえば兪鎮午は、「建國準備委員会の権威を高めるために大いに利用された」と指摘しつつ、建國同盟が植民地支配末期に実際に組織されていたことに疑問を提示した（兪鎮午『未來に向かう窓—歴史の分水嶺に立って—』、一潮閣ソウル、一九七八年、二七四—二七五頁）。呂運亨研究の権威である李庭植も、呂運亨についての伝記的な大作のなかで、建國同盟が「不文、不言、不明」を原則とするのであれば、「その団体に名前があるわけがない」と指摘して、それについて記述することを自制した（李庭植『呂運亨』、四八七—四八八頁）。キムギヒョプも、それを「過大包装」と推定した（『解放日記』第二卷、七七—七八頁）。

(21) 民主主義民族戦線編『朝鮮解放年報』、八〇頁。『毎日新報』（一九四五年八月一日）。李萬珪『呂運亨闘争史』、二一〇頁。南時旭『韓国保守勢力研究』、一九九—二〇〇頁。金南植『南労働党研究』（ソウル、トルベゲ、一九八四年）、一七一—一八頁。

(22) 李萬珪『呂運亨闘争史』、二一〇—二一六頁。李萬珪は宣言と綱領を八月二五日に発表したと記述しているが、『毎日新報』が掲載した宣言と綱領の日付は八月二八日になっている。柳文華『解放後四年間の国内外重要日誌』（ソウル、民主朝鮮社、一九四九年、八頁）も八月二八日と記録している。ただし、奇妙なことに、最終的に建國準備委員会書記局はこれを九月二日午後三時に発表した（『毎日新報』一九四五年九月三日）。この間の事情については、徐仲錫の分析を参照されたい（徐仲錫『韓国現代民族運動研究—解放後民族国家建設運動と統一戦線—』、ソウル、歴史批評社、一九九六年、二二三頁）。

(23) 『毎日新報』（一九四五年九月三日）。李萬珪『呂運亨闘争史』、一八五頁。山名『朝鮮総督府終政の記録』、二二—二三頁。ソウル市内では、『毎日新報』（八月二四日）の報道以後、「朝鮮を南北に分割して、米ソ両軍が軍政を布く」との噂が広まり、八月二八日になって、朝鮮軍管区司令部が九月二日以後に「三十八度線以南における米軍と朝鮮軍との間の局地協定を開始する」こと、「その相手は米第二四軍団である。その進駐時期及び上陸地点は未だ何ら通告に接し非ず」と発表した（森田・長田『朝鮮終戦の記録』資料編第二卷、一五二、二八六頁）。ただし、八月二

- 三日に朝鮮軍参謀長が関東軍参謀長に宛てた電報には、「八月二十六日以後、南部朝鮮ニ連合国側進駐スルモノノ如シ。朝鮮軍ハ京城以南ノ朝鮮ニ関シ……停戦及武装解除等ヲ处理致スニ付キ、承知相成度。」(『終戦時朝鮮築電報綴』昭和二〇年八月、防衛研究所戦史研究センター)とある。なお、開城に侵入したソ連軍は、それが三八度線以北に位置するものと誤解したようである。日本軍はソウルからソ連製の百万分の一の地図を開城に持参して、ソ連軍部隊長に撤退を要請した。しかし、その後も駐留を継続したために、三〇日に井原参謀長が平壤師管区参謀長に撤退交渉を依頼し、九月三日に上月司令官が沖繩の米軍司令部に電報で報告した。ソ連軍は九月一日までに完全に撤退し、九月一三日に米軍が進駐した(森田『朝鮮終戦の記録』、一七五—一七六頁)。
- (24) 八月二二日の組織改編は民主主義民族戦線編『朝鮮解放年報』(八二頁)に記録されているだけである。呂運亨や李萬珪は何も語っていない。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、二〇七—二〇八頁。ただし、この評価は金南植の分析と対立している(金南植『南労働党研究』、四五—四六頁)。共產主義者による建国準備委員会への浸透工作は呂運亨宅に近い洪瑄植宅を拠点とした。洪は朴憲水の側近であり、その仕事を「換骨奪胎」と表現していた。朴甲東『朴憲水』(ソウル、人間社、一九八三年)、九六頁。『仁村金性洙傳』、四七〇—四七二頁。安在鴻「夢陽呂運亨氏の追憶」、『安在鴻選集』第二卷、二〇四—二〇五頁。
- (25) 『毎日新報』(一九四五年九月三日、九月四日)。李萬珪『呂運亨闘争史』、二二六—二二二頁。李庭植『呂運亨』、五一—五一—五五頁、李起夏『韓国政党史』、四二—四三頁。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、二〇八—二〇九頁。委員長、副委員長以外の新しい人事は、朝鮮人民共和国の樹立が宣言された九月六日に、人民代表委員(閣僚)が任命されるまでの暫定人事として決定された(『毎日新報』一九四五年九月七日)。
- (26) 『毎日新報』(一九四五年九月二日、九月七日)。安在鴻「朝鮮建国準備委員会と余の処地」、『安在鴻選集』第二卷、一三一—一四頁。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、二二〇—二二二頁。李庭植『呂運亨』、五二七頁。李萬珪『呂運亨闘争史』、一六九—一七一、一八九—一九〇頁。
- (27) 『資料・大韓民国史』第一卷、四九—五一頁、五七—五九頁、六〇—六三頁。『仁村金性洙傳』、四七四—四七五頁。
- (28) ビラ『資料・大韓民国史』第一卷、六〇—六三頁。『仁村金性洙傳』、四七四—四七五頁。金度演『私の人生白

- 書・常山回想録』(ソウル、常山金度演博士回顧録出版同志会、一九六七年)、一五五―一五七頁。白南薫『私の一生』(ソウル、解慍白南薫先生紀念事業會、一九六八年)、一四七―一五〇頁。宋南憲『韓国現代政治史』第一卷、一三三―一三二頁。沈之淵『韓国民主黨研究』第一卷(ソウル、プルビツ、一九八二年)、四八―四九頁。
- (29) 『新朝鮮建設の大道』、『夢陽呂連亨全集』所収。趙炳玉『私の回想録』(ソウル、民教社、一九五九年)、一四六―一四七頁。
- (30) 『毎日新報』(一九四五年九月一七日)。「古下宋鎮禹先生傳」、三一九―三二〇頁。金度演『私の人生白書』、一五七頁。『仁村金性洙傳』、四七五―四七八頁。趙炳玉『私の回想録』、一四四―一四六頁。沈之淵『韓国民主黨研究』第一卷、五五―五六頁。南時旭『韓国保守勢力研究』、二二―二二二頁。
- (31) Dae-Sook Suh, *The Korean Communist Movement 1918-1948*, Princeton: Princeton University Press, 1967, pp. 68-73, 191-193. 中央日報特別取材班『朝鮮民主主義人民共和國』(上)(ソウル、中央日報社、一九九二年)、二七八―二八〇頁。「自筆履歷書」、而丁朴憲永全集編集委員會編『而丁朴憲永全集』第二卷(ソウル、歴史批評社、二〇〇四年)、五六―五九頁。イムギョンスク『而丁朴憲永一代記』(ソウル、歴史批評社、二〇〇四年)、一八八―二〇四頁。
- (32) 鄭栢「八月十五日朝鮮共産黨組織經過報告書」、『朝鮮共産黨文件資料集』、七一―八頁。金南植『南共産黨研究』、一六一―一九頁。高峻石『南朝鮮労働黨史』(勁草書房、一九七八年)、三〇―三二頁。金俊淵の証言は劇的である。八月一五日午前一〇時頃、宋鎮禹の回答を持って鄭栢の宿所を訪問する途中、昌徳宮警察署前で偶然に呂連亨と遭遇したというのである。金が宋の回答を伝えて、「私も出ない」と言明すると、呂は決然とした態度で「それならばよい。私一人で行く。共産革命に一路邁進する」と語ったとされる。また、その日の午後、鄭栢から電話があり、「ソ連軍がすぐ京城に入り、我々がすぐに内閣を組織するが、あなたは後悔しないか」と詰問されたという(金俊淵「独立路線」、二六三―二六五頁)。
- (33) 朴甲東『朴憲永』、八四―八九頁。イムギョンスク『朴憲永』、二〇七―二二三頁。中央日報特別取材班『朝鮮民主主義人民共和國(上)』、二八〇―二八四頁。
- (34) "Resolution of the E.C.C.I. on Korean Question," Dae-Sook Suh ed. *Documents of Korean Communism 1918-*

- 1948, Princeton: Princeton University Press, 1970, pp. 243-282; Dae-Sook Suh, *The Korean Communist Movement*, pp. 108-114, 178-182, 199-203. 「現情勢と我らの任務」(八月テーゼ)、『一九四五年八月二〇日』、『朴憲永全集』第二卷、四七—五六頁。「現情勢と我々の任務」、金南植編『南労党』研究資料集』第一輯、共産圏資料叢書④(ソウル、高麗大学校重細重問題研究所、一九七四、八一—二二頁)。
- (35) 「現情勢と我らの任務」(八月テーゼ)、『朴憲永全集』第二卷、四七—五六頁。
- (36) 「現情勢と我らの任務」(八月テーゼ)、『朴憲永全集』第二卷、四九—五二頁。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、一三三—一三三頁。
- (37) 金南植『南労党研究』、二六—二七頁。高峻石『南朝鮮労働党史』、三八頁。大検察庁捜査局『左翼事件実録』第一卷(ソウル、大検察庁捜査局、一九六五年)、二二—二五頁。「熱誠者大会の経過」(上、中、下)、朝鮮共産党中央委員会機関紙『解放日報』(一九四五年九月二五日、一〇月二日、一〇月一八日)、金南植・李庭植・韓洪九編『現代韓国史資料叢書(1945-1948)』第五卷(ソウル、トルペゲ、一九八六年)収録。鄭栢「八月十五日朝鮮共産党組織経過報告書」、『朝鮮共産党文件資料集』、九—一〇頁。
- (38) 「熱誠者大会の経過」(上)、『解放日報』(一九四五年九月二五日)。
- (39) 「熱誠者大会の経過」(中)、『解放日報』(一九四五年一〇月二、一八日)。
- (40) 「朝鮮共産党の再建とその現状況」、『朴憲永全集』第二卷、二〇九頁。なお、その他の説については、徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、一三三頁を参照されたい。『解放日報』(一九四五年九月一五日、九月一九日)。「毎日新報」(一九四五年一〇月二四日)。「自由新聞」(一九四五年一二月二四日)。それに対して、再建派共産党は朝鮮共産党中央委員会代表朴憲永の名義で歓迎声明を発表した(『解放日報』一九四五年二月四日)。
- (41) 『毎日新報』(一九四五年九月七日)。李萬珪『呂運亨闘争史』、二六一—二六二頁。もつとも生々しい証言によれば、九月四日に呂運亨、朴憲永、鄭栢が医専病院内科に入院中の許憲の病室を訪れ、四人で人民共和国の創立について協議した(朴暲遠『南労働党総批判』上巻、ソウル、極東情報社、一九四八年、三三—三三頁)。なお、大会の開始時刻について、李萬珪『呂運亨闘争史』は午後七時、『毎日新報』は午後九時としている。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、二二七—二二八頁。金南植『南労党研究』、四六頁。

- (42) 李萬珪『呂運亨鬭争史』、二五九—二六〇頁。一〇月一日の呂運亨の記者会見、『毎日新報』(一九四五年一〇月二日)。
- (43) 『毎日新報』(一九四五年九月七日)。李萬珪『呂運亨鬭争史』、二六〇—二六一頁。金南植『南労党研究』、四七—四八頁。
- (44) 李萬珪『呂運亨鬭争史』、二六一—二六二頁。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、二一九—二二〇頁。
- (45) 李萬珪『呂運亨鬭争史』、二六〇—二六二頁。金南植『南労党研究』、四九—五〇頁。呂運弘『夢陽呂運亨』、一五六—一五七頁。
- (46) 『毎日新報』(一九四五年九月一五、一九日)。李萬珪『呂運亨鬭争史』、二二六頁。金南植『南労党研究』、四八—五〇頁。なお、『毎日新報』が報じた政府部署名簿は以下の通りである。括弧内は「臨時代理」である。主席・李承晩、副主席・呂運亨、國務總理・許憲、内務部長・金九(許憲)、外交部長・金奎植(呂運亨)、軍事部長・金元鳳(金世鎔)、財政部長・曹晩植、保安部長・崔容達、司法部長・金炳魯(許憲)、文教部長・金性洙(李萬珪)、宣伝部長・李觀述、經濟部長・河弼源、農林部長・康基德、保健部長・李萬珪、通信部長・申翼熙(李康国)、交通部長・洪南杓、労働部長・李胄相、書記長・申康玉、法制局長・崔益翰、企画局長・鄭栢。
- (47) 李萬珪『呂運亨鬭争史』、二六二—二六五頁。金南植『南労党研究』、四九—五〇頁。徐仲錫『韓国現代民族運動研究』、二二三—二二四頁。なお、朝鮮共産党平安南道委員会が第四拡大委員会を開催して、「正しい路線」を確立したのは九月二五日のことである。
- (48) General Todd's Notebook: General Hodge's First Speech in the Civic Auditorium, 12 September 1945, Box 27, RG 332, Washington National Record Center (Suitland); *G-2 Periodic Report*, No. 3, 13 September 1945, Headquarters USAFK, *History of USAFK*, Vol. II, Chapter I, pp. 2-5; *History of USMGIK*, Part I, Vol. I, pp. 203-204; 『毎日新報』(一九四五年九月一三日)。『全国人民委員会代表者大会議事録』、同大会書記部編、五一頁。
- (49) General Hodge's First Speech: Corps Staff Conference, Chosun Hotel, 12 September 1945, Box 27, RG 332, WNRC.
- (50) *G-2 Periodic Report*, No. 2, 12 September 1945; Benninghoff to Byrnes, 15 September 1945, *FRUS, 1945*, Vol.

- VI, pp. 1049-1053.
- (16) Benninghoff to Byrnes, 29 September 1945, *FRUS, 1945*, Vol. VI, pp. 1061-65.
- (17) *Ibid.*
- (18) *G-2 Periodic Report*, No. 3, 13 September 1945; *History of USAFIK*, Vol. II, Chapter I, pp. 2-5; *History of USAFIK*, Part I, Vol. I, p. 205. 『毎日新報』(一九四五年九月一三日)。Benninghoff to Byrnes, 15 September 1945, *FRUS, 1945*, Vol. VI, p. 1050. なお、老人がホッピンに手交したのが何であったのかについては、異なる説明がなされる。『毎日新報』は「太極旗、『在韓米軍史』(*History of USAFIK*)は文書(a document)としてG-3定期報告は古い朝鮮を代表する国璽(national seal)と筆記文字(scrip)と記録している。
- (19) 森田『朝鮮終戦の記録』一七四—一七五頁。森田芳夫・長田かな子編『朝鮮終戦の記録』資料篇第二巻、一一八—一一九、二六三頁。*G-2 Periodic Report*, No. 2, 12 September 1945; *History of USAFIK*, Vol. II, Chapter I, p. 5.
- (20) 呂運弘『夢陽呂運亨』一六一—一六六頁。*G-2 Periodic Report*, No. 1, 11 September 1945; *History of USAFIK*, Vol. II, Chapter I, pp. 1-2; Gregory Henderson, *Korea: The Politics of Vortex*, Cambridge: Harvard University Press, 1968, p. 126. なお、二種類の名簿はG-2定期報告(第二号)に収録されている。信頼できる人物として、呂運亨、白象圭、趙漢用、安在鴻、曹晩植など、一七名の名前が挙げられている。そのなかには、韓国民民主党の金性洙の名前はあるが、その盟友である宋鎮禹の名前はない。その他の多くは知識人や実業家である。また、対日協力者とされた一四名のうちの大部分は日本の統治機構と直接的に関係をもった人々である。
- (21) *G-2 Periodic Report*, No. 2, 12 September 1945. 『毎日新報』(一九四五年一〇月三日)。
- (22) 『毎日新報』(一九四五年一〇月二日)。「The Central People's Committee of the People's Republic of Korea. "A Message to U.S.A. Citizens," 5 October 1945, Box 24, XXIV Corps History Section, USAFIK, RG 332, WNRRC.
- (23) Major General A. V. Arnold, Military Governor of Korea, "To the Press of Korea," Box 1, Papers of Peter Grant, RG-60, MacArthur Memorial Archives (Norfolk); Benninghoff to Atcheson, 9 October 1945, *FRUS, 1945*, Vol. VI, p. 1069. 『毎日新報』(一九四五年一〇月一日、一四日)。
- (24) 李康国『民主主義朝鮮の建設』(ソウル、朝鮮人民報社、一九四六年)収録、六一七、二二二—二四頁。

- (60) *History of USMGIK*, Part I, Vol. I, pp. 31-32. 金雲泰『米軍政の韓国統治』(ソウル、博英社、一九九二年)、一八六一—一八九頁。安鎮『米軍政と韓国の民主主義』(ソウル、ハヌル・アカデミー、二〇〇五年)、一六四—一六六頁。
- (61) 『毎日新報』(一九四五年九月一七日)。沈之淵『韓国現代政党史論』(ソウル、創作と批評社、一九八四年)、五五—五六頁。沈之淵『韓国民主党研究Ⅰ』(ソウル、プルピッ、一九八二年)、一三八頁。宋南憲『解放三年史Ⅰ』(ソウル、カチ、一九八五年)、一〇—一頁。『自由新聞』(一九四五年一〇月七日)。北朝鮮に在住する曹晩植が顧問に任命された経過は明確ではないが、一〇月一日にマーシャル陸軍参謀総長がマッカーサーに宛てた電報が、準備中の南朝鮮地域の民政のための基本指令の内容に触れて、「南朝鮮の行政機構は、ソ連と合意して容易に全朝鮮に拡大して適用できるように調整されるべきである」と指摘してつた (Marshall to MacArthur, 1 October 1945, *FRUS, 1945*, Vol. VI, pp. 1067-1068)。また、一〇月九日の記者会見で、アーノルドは「将来は顧問の人数を増加して、全朝鮮を網羅する予定である」と言明した(『毎日新報』一九四五年一〇月九日)。
- (62) 『自由新聞』(一九四五年一〇月六日、九日)。李萬珪『呂運亨闘争史』、一三七—二四二頁。崔永禧『激動の解放3年』(ソウル、翰林大学アジア文化研究所、一九九六年)、五一頁。
- (63) 『自由新聞』(一九四五年一〇月八日、一〇月九日)。
- (64) 『毎日新報』(一九四五年一〇月六日、一〇月二二日)。「自由新聞」(一九四五年一〇月九日、一〇月一五日)。沈之淵『人民党研究』(ソウル、慶南大学極東問題研究所、一九九一年)、七—八頁。崔永禧『激動の解放3年』、五一—五二、六二—六三頁。
- (65) 「民族統一政権を支持、朝鮮共産党朴憲永氏政見を吐露」、『朝鮮人民報』(一九四五年一〇月一日)、「朴憲永一代記」、二二二—二三四頁に収録。
- (66) 安鎮『米軍政と韓国の民主主義』、一六四—一六八頁。沈之淵『韓国現代政党史論』、五六頁。金雲泰『米軍政の韓国統治』、一八八—一八九頁。宋南憲『解放三年史Ⅰ』、九七頁。張炳玉『私の回顧録』、一四九—一五二頁。「自由新聞」(一九四五年一〇月二七日)。
- (67) 張炳玉『私の回顧録』、一五四—一五六頁。石井治助(忠清南道高等警察課長)の証言(『同和』第一五八号、一五九号)、坪井幸生(忠清北道警察部長)の証言(『同和』第一五四—一五六号)、森田・長田編『朝鮮終戦の記録』

資料編第一巻所収、三八〇―三八八、三八八―三九七頁。C. Leonard Hoag, *American Military Government in Korea: War Policy and the First Year of Occupation 1945-1946*, Draft Manuscript, History Division, Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1970, pp. 144-146, 157-158. 『自由新聞』(一九四五年一〇月三十一日)。

(68) 八木信雄(全羅南道知事)の証言(『同和』第一六一号、一六二号)、斎藤実(全羅南道地方課長)の証言(『同和』第一六三号)、市原感一(慶尚北道高騰警察課長)その他の証言(『同和』第一六四号)、森田・長田編『朝鮮終戦の記録』資料編第一巻所収、三九七―四〇五、四〇五―四〇七、四二四―四三〇頁。金昌珍「8・15直後光州地方における政治闘争―1945〜46年人民委員会運動と米軍政の性格―」、歴史問題研究所編『歴史批評』第一集(ソウル、歴史批評社、一九八七年)、九九―一三五頁。*History of USAFIK*, Part III, Chapter III, pp. 44-48; Hoag, *American Military Government in Korea*, pp. 161-162; Meade, *American Military Government in Korea*, pp. 54-58, 69-73. ただし、ミードはこの陰謀が実際に存在したかどうかの最終的な判断を留保した。

(69) 八木の証言、森田・長田編『朝鮮終戦の記録』資料編第一巻、四〇三頁。*History of USAFIK*, Vol. I, pp. 210-211. 世論室は「諜報・情報部門」(Intelligence and Information Section)に属して、各地方を調査旅行する五つのチームをもつていた(Hoag, *American Military Government in Korea*, pp. 246-247)。